
空色の約束

芹島義輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色の約束

【Nコード】

N2056F

【作者名】

芹島義輝

【あらすじ】

ヤンチャな高校生の物語。

主人公の半村忍はストリートで起こる様々な事件や恋愛、その中で出会う人々を通じて少しずつ成長していく。

5年後や10年後のことなんて何も考えず、ただ「今」を生きていたあの時。

池袋、渋谷を中心に遊びまくっていた高校生活をリアルに描く。

ブローグ

その日もいつもと変わらない風景だった。

長く降り続いた梅雨も明け始め期末テストの空気が教室に蔓延している。

そんな空気とは正反対に外は初夏を告げる青々とした空が広がっていた。

俺はいつものように学校の屋上に集まり、紙パックのコーヒーを片手にタバコを吸っていた。

「つまんねーな」

ふと独りでに言葉が出てしまう。

俺は半村忍（はんむらしのぶ）。高校一年になった。だが何の新鮮味も無い。

新しい環境に対する期待も、ときめきも皆無だ。

なぜかって？

俺は教育熱心な母親の影響で中学受験というものをさせられた。

小学校の時は勉強しなくても成績が良かった。

背は小さかったが運動神経もいいほうだった。

地元のサッカークラブでもレギュラーだったし、学年の持久走大会では常に2位。

だからクラスでの存在感はそこそこあったし、女の子から手紙をよくもらっていた。

でも小学校5年の時、大好きなサッカーを突然止めさせられて、勉強しろと言われた。

無理やりやらされた為、塾をよくサボってゲーセンにすることが多かった。

そんな俺が名門校に受かる訳もなく、かといって公立中学に行くでもなく、中途半端な私立の男子校に入学した。

俺は入学前、行きたくないと言った。

しかし、大学までエスカレーターで行けるんだからと説得され渋々行くことにした。

この中学生生活が最悪だった。

クラスメートは同じような価値観の親に育てられたそこそこの坊ちゃん達。

毎日満員電車で揺られ、学校に通う。

一度、やめたサッカーをまたやる気にはならず、何となくゴルフ部に入った。

中学にゴルフ部があるなんてなんとも私立って感じだろ。

だが、部員は気持ち悪い奴しかいなかった。

今でこそ、遼君効果で学生ゴルフが脚光を浴びているが、その当時は超マイナーなスポーツ。

オヤジくさいスポーツだ。入った後に後悔した。

でも気付いたときにはもう遅い。

今さら他の部には入れないような雰囲気になってしまったし、転部してまで作り上げられた空気に溶け込む気力も無かった。

そのうち地元の友達とも疎遠になった。そしてクラスでの居場所も失っていく。

俺は身体の成長が比較的遅く、あれだけ良かった体育の成績も中の中になり、小学校の時に勉強ができた奴らに囲まれ、勉学の成績も落ち込んだ。

生まれて初めて挫折した。ポツキリと。

そこから這い上がるような精神力も育んでこなかった。
そして中学2年の時、あまり学校へ行かなくなった。

米倉智也という男

世の中を知らないというのは怖い。

大学を卒業し、一般的な企業に就職しないと最悪の人生になると、親や学校から教育され、それに順応できない自分への恐怖。

レールを外れる事への恐怖。その価値観に感化されたクラスメート。誰にも相談できなかった。暗黒の中学時代だった。

クラスで孤立し続け、中学3年になった。

いじめられていた訳ではなく、表面的な友達付き合いはあったが親友と呼べるような奴は居なかった。

ただなんとなくその時を生きていた。

そんなある日学校の自販機の前で財布を拾った。

確か1万円ぐらい入っていた気がする。

何を思ったか届けようとした。

当時の俺にはその金を使うアテがないほど人生がとてつまらなく感じていたからだ。

しかし、それが俺の人生の転機だったと思う。

カード入れのところに学生証が入っていた。

見ると米倉智也という人で高校3年生だった。

ウチの学校は同じ敷地内に付属の中学と高校がある為、休み時間に届けに行った。

高3のフロアーにいき、教室の中にいる人に、

「米倉って人いますか？」

と訊ねた。

ドア付近で談笑していた人が気付き、

「ん？米倉さんに何の用？」

と聞いてきた。

俺は一瞬間違った学年のフロアーに来たと思ってドアの上の看板を見たが、確かに「3・A」と書いてある。

何でさん付けなんだろうと疑問に思いつつ、

「落とし物を届けに来たんですけど…」

と聞いた。すると、

「米倉さん達なら昼休みはいつも屋上にいるよ。だけどあそこは鍵がないと入れないから、会えないと思うよ」

と教えてくれた。

俺は

「そうですか。ありがとうございます」

とお礼を言い、その足で屋上へと向かった。

実は俺も屋上の鍵を持っていた。

なぜならゴルフ部の練習は屋上で行う。

ある日部活の後、鍵を返し忘れ、次の日から何日か学校を休んだ事があった。

その間に鍵の所在がうやむやになり、俺も言い出すのが面倒でそのまま持ち続けていたからだ。

「ガチャ…」

屋上の鍵を開けると、

「やべえっ！」

という声と共に何人かの高校生達がざわついていた。

しかし俺の姿を認めると、一人が近づいてきた。

「オイ！何だお前？ん？チツ、中坊かよ。ガキが何しに来たんだよ、コラ！」

俺はケン力腰のその態度がなんとなく気に食わなくて黙っていた。

「あ？何お前？調子乗ってんの？」

そういつて俺の髪を掴んだ。

その瞬間、財布の事など忘れてその男を睨み返した。
ただ黙って睨み続ける。

俺の予想外の反応にその男は少し及び腰になった。

「チツ、何なんだよコイツ。オイ！ここの事は誰にも言っんじゃねーぞ！」

そう言い捨て、そろそろと高校生達は屋上を後にした。

しかし、一人だけ残っている人物がいた。

タバコをふかしながら、何事も無かったかのように座って雑誌を読んでいた。

ふと、顔を上げ、今初めて俺の存在に気づいたかのような表情をした。

「ん？何してるの？何か用？」

さっきまでの人達とは違い、穏やかな口調だった。

俺はその人のそばまで近づき、

「あの、米倉って人知りませんか？」

と聞いた。

「ん？俺だけど、どうしたの？」

俺は改めてしっかりとその人を見た。

不思議な感じがした。

モデルのような涼しげな顔立ちなのに何故か目だけはオオカミのよ
うな眼差し。

つかみどころの無い雲のような表情で俺を見ていた。

「財布、落ちてました」

「ああ、ありがとう」

何も焦ったような表情も見せず、受け取り中身を確認する。

ふと、手が止まる。

「あれ？全部入ってるよ？」

普通は安心するか喜ぶはずなのに、何故か困ったような顔をしてい

る。

カード入れの所を確認しながら、

「なあ、なんで何も取らなかったの？仲間にもなりたいの？」
と、予想外の言葉を言ってきた。

「別に…、金あっても使い道なんてないんで」

そっぴいうとその人は俺を改めて見る。

ぽかーんとした表情を今でも覚えている。

その後、爆笑された。

それまで全然表情が掴めず人形のようにだったのに、その変わり様に驚いた。

「そーかあ、何か変わってんなあ…。ところでお前さ…」

そっぴいうと柔らかな表情をし、

「人生つまんねーんだろ」

と言われた。

普段の俺だったならまたいつもの様に睨みつけるはずなのに、何故か頷くしかできなかった。

初めて誰かに負けたような感覚に陥った。

それがすごく恥ずかしく思った。

そんな俺を興味深そうに見ると、

「お前面白そうな奴だな。なあ、これから一緒にメシでも食いに行くか？」

と言われた。遠まわしなカツアゲかと思った俺は

「いや、金なんてないですよ」

といったら、

「大丈夫、俺に任せとけ。じゃあ決まりな。いくぞ」

と言って立ち上がりスタスタと歩いていく。

俺はなんとなく後を追っていた。

初めてのケンカ

俺達は学校を抜け出した。

校門を出るとき遠くから教師に呼び止められたが、米倉さんは後ろ手で手を振り悠然と歩いて出ていった。

学校の近くの小さい歩道橋が見えた。

人通りの少ない場所に架けられた、あまり意味を成していない歩道橋だ。

そしてその下に1台のバイクが置いてある。

しかし、何人かの男達がそこにたむろっていた。

米倉さんがささやく。

「なあ、あの中で一番強い奴って誰だと思っ？」

「え？バイクに跨ってる奴ですかね」

「んゝまあまあだな。でも一番強えのはきつとあいつだ」

そういつて歩道橋の階段に座り、携帯をいじってる男を指差した。確かにやたら雰囲気があった。

「じゃあ、俺は階段の男に行くから、バイクに乗ってる奴はお前に任せる」

俺は最初何を言われてるのか全く分からなかったが、米倉さんの目を見て気づいた。

ケンカか……。マジかよ……。したことねえよ……。しかも相手高校生……。

そんな不安が広がり、米倉さんに聞いた。

「さすがに5人はヤバくないですか？俺、ケン力なんてしたこと無いですよ？」

そういうと米倉さんはさらに楽しそうに

「マジか、デビュー戦か。おめでとう、白星スタートだな」

「いやいやいや…、どう考えてもデビュー戦の相手と違う気がするんですけど」

「でも見つけちゃったし、しょうがなくね。それに5人なら豪勢なメシが食えるぞ」

えええ！？この人カツアゲまでしようとしてますけど…。

俺が不安そうな顔をぬぐいきれないでいると

「ははっ、お前いい顔してんなあ。さっきまでとは大違いだぞ」

そういわれて気づいた。

今までこんなにいるんな感情が湧いたことなんてなかった。

どうなっても、米倉さんの言う通りにしてみようと思いはじめた。

「じゃあ、どうすればいいんですかね」

「お、ちよっとはやる気になったな。そうだなあ、最初は蹴りだ」

「蹴りっすね」
「で、次も蹴りだ。でまた蹴り。さらに蹴り。いいか足しか使っなよ」

「何ですか？」

「最初は殴ろうとしても力が入らないからな。下手に殴ると手も痛

いし、リーチも短いから。それから…」

「はい」

「バイクの奴一人だけをやれ！躊躇すんなよ、思いつきりいけ！」

「はい！」

俺が返事したときには米倉さんは走り出していた。

慌てて追いかけた。

一直線に階段へダッシュする米倉さん。

俺は言われたとおり歩道橋の下の4人組に向かった。

走るにつれてどんどん4人が視界に大きく映る。

最初に気づいたのはバイクの左隣にいた男。

しかし事態がつかめず、そのままこちらを見ている。

そのタイミングで右隣の奴もこっちをみる。

まだバイクに跨っている男と、俺達に対して後ろ向きにしゃがんで
いる男は気づいていない。

その二人はバイクのタンク部分をいじっている。

左の男が何かを叫んだようだが俺には声は聞こえなかった。

後ろ向きの男が立ち上がりかけた時、俺はその集団に突っ込んだ。

その間、5秒も無かったはずだ。

俺は後ろ向きの男の肩に手をかけ、大きくジャンプ。

そのままドロップキックでバイクに跨っている男をけっばぐった。

バイクごと男が倒れる。勢いあまった俺がその上に乗っかる。

立ち上がりながら、バイクに挟まれ動けない男の顔めがけてキック。

ヤバイ、ちよつと躊躇した！

引き際の足を掴まれる。

俺はもう片方の足でそいつの腕を蹴る！蹴る！蹴る！

掴まれていた足が離れた。

もう一度、今度は上から顔を踏み潰そうとした。

次の瞬間、後ろから羽交い絞めにされる。横から誰かに殴られる。痛くは無い。力が全然入ってないのがわかった。

羽交い絞めされたまま持ち上げられそうになった。

俺はがむしゃらに頭を振り運よく後ろの男の顎にヒット！

力が緩んだ隙に踵で後ろの奴のスネを蹴る。

身体が自由になる。

しかし、バイクに乗っていた男も立ち上がり、口を血だらけにしなから俺の髪を掴む。

そのままバイクのハンドルとハンドルの間に俺の顔をぶつける。

目の前で火花が散ったようにチカチカした。

もう一度顔を持ち上げられた時、顔に激痛が走る。

かろうじて片目だけを開ける。

すると男の拳が目前まで迫っていた。

やべえっ！

そう思った瞬間

俺の髪を掴んでいた男の顔がゆがむ。

横から米倉さんの跳びヒザがめり込んでいた。

一瞬そいつの首がありえない方向まで吹っ飛んだあと、また戻ってきてその場に倒れた。

俺はそのまま後ろに下がり、尻餅をついた。

後はもう見てるだけでよかった。

残り3人を米倉さんがあつという間に倒してしまったからだ。階段の方を見るとうつ伏せで倒れている男がいた。

歩道橋の下に正座する5人組。

その前に米倉さんと俺が立っている。俺は目の上が切れていた。

最初に米倉さんが相手したいた男はしきりにアバラを押えて苦しもうに息をしている。

鼻も折れているようだ。

バイクに跨っていた男は首を押えている。下を向いたまま泣いていた。

他の3人はビビッて震えながら正座していた。

米倉さんがしゃべりだす。

「俺のバイクで何してたの？」

ああ、米倉さんのバイクだったんですね…。

「いや、あの…」

と、バイクに跨っていた男が何もいえないでいると米倉さんはおもむろにそいつの顔をトーキックした。

そいつはそのまま土下座するように倒れた。

「バイクの修理費ちょうだい」

と米倉さんが言い、手を差し出す。

おとなしく5人は財布を出した。

お金を抜き取りながら

「もうこの辺うろついちゃだめだよ。見かけたらどうなるかわるでしょ」

「は、はい…」

「じゃあ、行つていいよ」

「すいませんでした」

そういつてすごすごと去つていった。

「ああ、メーターにヒビはいつてる。血も付いてるし」

「あ、すいません。それ俺の血です」

「あ、そうなん？まあ気にしなくていいよ。修理費貰ったし。ところでどうだった？デビュー戦」

「…痛かったです」

そういつて笑った。本当に久しぶりに笑った。

その後、米倉さんのバイクの後ろに乗せてもらい、メシ食いにいった。

俺は思った。

学校の先輩と話したのも、学校を抜け出したのも初めてだった。

バイクに乗ることも。

そしてケンカをしたことも。

なんかすべてが新鮮だった。人生をつまんねーと思って生きてきた自分がバカらしかった。

いろんな感情を忘れたまま、ずっと生きてきたことに気づいた。この人といるとちよつとは人間らしく生きれるかなと思った。

まあ、デビュー戦は白でも黒でもなくグレーだったけど。

唯一の居場所

それから俺は高校生のグループと行動を共にするようになった。

お陰で俺はクラスの奴らからもさらに孤立していった。
もう近づいてこないような感じた。

しかし高校生からしてみても、中坊の俺はガキ臭く、最初はあまり相手にはしてもらえてなかった。
それでも良かった。

どこにいても居場所が無かった俺にとって、学校に居場所が無い人達の集まりは教室にいるよりよっぽど気が楽だからだ。

でも、その中のリーダーだった米倉智也さんは何かと俺に優しくかった。

米倉さんはケンカも強く、女友達も多い。

そして他校にも友達がいっぱいいる。その分敵も多いが。

そして男子校では女友達の多さは重要だ。おかげで米倉さんの周りには男女を問わず取り巻きの多かった。

ただ、おっかない人達でもあるので、遠慮がちに接する奴には冷たかった。

度胸が無い奴にも興味が無いようだった。

俺は米倉さんから弟のように可愛がられ、アホな事を一緒にやった。一度、ナゼ俺みたいな中坊を他の人達より良く扱ってくれるのかたずねてみた。

そしたら一言だけ

「なんか、昔の俺に似てんだよね」

そう言われただけだった。なんだかすごく嬉しくなった。

そのうちアホな事を俺が考え出し率先してやりだしたため、だんだん周りの人達からもグループの一員として認められるようになった。俺にとって初めての事だらけで失敗もあったが、そんな俺を見るのが楽しいと言ってくれた。

初めて原付に乗り、いきなりウイリーしてそのまま田んぼに突っ込んだり、

ナンパしてこいと言われてカラオケボックスに突入したり、

ウイスキーを一気飲みさせられてぶっ倒れたり、

スケボーにうつ伏せで乗せられて下り坂を爆走したり、

ケンカの最中、人間魚雷にされたり、

キツイ事もあったけど、その度に爆笑してくれる米倉さんに憧れた。

その後、最低限の出席日数で辛うじて中学を卒業した。

そして親が学校に頼み込み、他の奴らより多く寄付金を払い、高校受験もせず、そのままその付属の高校に進学し今に至る。

そしてどんどんドロップアウトしていった。

井出馨という男

しかし、高校に進むと微妙に違ってきた。

まず、俺は米倉さんが高校を卒業してしまったためそのグループとは疎遠になった。

そして同学年でもレールをうまく進めない奴らがポツリポツリと出てきた。

自然と、そいつらとつるむ様になった。

中学時代からヤンチャに過ごしてきた俺が何となくリーダー格になった。

中学からずっと同じ学校で過ごしてきたのに、仲良くなったのはごく最近だ。

屋上でタバコを吸い、コンビニでたむろって、街でナンパした。

他校の奴らともよくケンカした。

だけど私立の坊ちゃん校の為、ケンカなんかした事無い奴ばかりだった。

結局、ケンカしてるのは俺を含め3人ぐらい。後の奴らはただ突っ立てるだけ。

それでも良かった。今まで同級生の友達と呼べるような奴なんていなかった俺にとってケンカの強弱や度胸の有る無しなんて関係ないやりたい奴がやればそれでいいと思ってる。おかげで最初はボロボロにやられた。

俺はいつもみんなに

「弱くてゴメンな」

と謝っていた。

ただ、段々とケンカに加わる奴らが増えてきた。

最初は浮き足立っていた奴らも徐々に冷静に対処できるようになっていた。

一人一人が飛びぬけて強いわけではないが、連携してケンカするよ

うになった。

そのうち負ける事がなくなってきた。

俺はこいつ等が好きだ。決して最初から強いわけではなかったのに、必死で俺について来てくれた。

そんな中、俺は井出馨（いでおる）と急激に仲良くなった。

馨といっても男だ。そいつはその名前のせいで、中学時代よくいじめられていた。

俺も名前が忍だったからその気持ちは良く分かる。

俺と同じく中学の時から米倉さんのグループにいたが、当時存在感とは皆無だった。

俺は米倉さんが高校を卒業すると同時にそのグループを離れたが、馨はそのまま残っていた。

しかしそのうちそこでの居場所が無くなったのか、いつの間にか俺らのところにいた。

馨の親はそこそ有名な建築家で家がめっちゃ広い。

かおるの部屋が自然と俺らの溜まり場になった。

変な奴だが気が合った。

仲間内で俺しか頼る相手がいなかったからなのか常に俺と共にいる。みんなからデコボココンビと呼ばれる。

俺は身長169cm。馨は185cm。

他校の奴らとのケンカでは俺が啖呵を切り、馨が蹴散らす。

昔から馨は俺のやる事を常にマネていた。

最近では俺がメッシュを入れると馨もそうしたし、

シルバーアクセを買うとすかさず馨も購入した。

中学の時は、一時期俺がエアガンにはまると馨の部屋は改造エアガンでいっぱいになったし、

俺が先輩から原付を貰うと、馨も先輩から単車を買ひ、それを今でも手を加えて乗り続けている。

この間は、部屋でウインカーをハンダゴテで直していたし、

庭には積み替えたエンジンが転がっていた。
基本的に俺が最初に手を出し、馨がそれに輪をかけてハマるとい
うのがいつものパターンだった。

木庭貞二という男

そしてもう一人、木庭貞二（きばていじ）という奴が俺らのグループにいる。

中学の時は全然目立たなかったが、中3の終わりに事件があった。下校時間の最中、突如学校の周りにヤンキー達がバイクや車で集結した。

その数15人ぐらい。

さすがに学校中がビビッた。教師達も及び腰なのが印象的だった。みんなが帰れないでいると、ひとり貞二が近づいていった。

そして何事も無かったかのようにその中の一台の車に乗り込みバイクを引き連れ帰っていった。

その頃の貞二はまだ髪も真つ黒で、学校支給のかっこ悪いバックを担当、ズボンも引きずらない本当に普通の中学生だったから、みんな啞然とした。

その後、米倉さん達のグループが騒然となった。

「あいつは誰だ？」

とその話題で持ちきりになり、同学年の俺に聞いてきた。

といっても、俺もクラスが違うし、話した事も無いため全くわからなかった。

そして結局俺が調べる事になった。

次の日から、周りの奴に貞二について色々聞いてみたが、友達も少ないようでよく分からない。

（直接聞くしかないか…）

正直めんどくさかった。

米倉さんグループは力のある奴を求めている。

私立の坊ちゃん校は他校からかなりめられる。

米倉さん自身はちよつと違って、楽しくいられば良かったしケン力が多いほうがより楽しいと思う性質だから、軍団のようなものに

は興味はなく、貞二については何も聞いてこなかった。
俺もその考えに共感していた。

しかも、米倉さん以外から舎弟扱いされるのも気に食わなかった。
そんな感じだから積極的に近づこうとは思わなかった。

しかし一週間ほど経った頃、貞二のほうから話しかけてきた。

その時俺は学食にいた。

学食は高校生だけが使用してよく、中学生はパンやおにぎりなどの
購買部にのみ利用が限られていたが、俺は米倉さん達のいつもいる
席で馨と一緒に普通にラーメンを食べていた。

馨が先輩達の水を汲みに行っている間に俺の嫌いなメンマを大量に
移していると、貞二が話しかけてきた。

「今日、一緒に帰らねーか？」

先輩達の会話が止まり、一斉にこっちを見た。

それまで話したことない奴に話しかけられとまどった。

「ラブホとか行かないなら…」

と俺が答えると、先輩達が爆笑した。

貞二はバツが悪そうにしていた。さすがに悪いと思い言い直した。

「ごめん。でもおまえ唐突すぎ。俺、午後からサボっけどそれでい
いなら」

と俺は答えた。

先輩達から「忍ちゃんケツは守れよ！」と冷やかしの野次が飛んだ。
貞二はなんていっていいかわからず、その場にたたずんでいる。

その時米倉さんが助け舟を出した。

「おい、あんま中坊いじめんなよ」

その一言で野次が止んだ。

「こいつ友達少ないから、仲良くしてやってくれよ」

米倉さんは柔らかな笑顔でそう言った。

こーゆー時の米倉さんはホントにいい人だ。

いじめといじりの違いが良くわかってるんだと思う。

「おい忍、こいつに何か買ってきてやれよ」

そういつて米倉さんから千円渡された。

俺は貞二にラーメンでいいかと聞くとうんと頷き、俺も一緒に行くといつてついて来ようとした。

その時また米倉さんが、

「忍は午後からふけんだろ。キミも今のうちにカバン取ってこないと午後から抜けられないんじゃない？先、取って来いよ」

結局貞二は

「すみません、ありがとうございます」

と言つてその通りにし、俺がラーメンを持ってくる頃には荷物を持つて戻つていた。

それつきり米倉さんは貞二に関わる事はせず、先輩達とマージャンの話で盛り上がつていた。

俺は髻を交えてギクシャクとした会話をしながら伸びきつたラーメンをすすつた。

その日は午後から貞二と学校を抜け出した。

ホントは池袋に行こうとしていたが、まだ親しくもない貞二と遊ぶ気にもなれずあてもなくプラプラと歩いていた。

何を話したらいいかわからず、会話は途切れがちだった。

そんな空気の中、空気を読まずに貞二に聞いた。

「なあ、この間、やたらいかついやつらと帰つてたよなあ。意外だな」

「あー、うん。その話なんだけど…、あれ以来、お前らのグループの人達がちよくちよく睨んでくるんだよね」

貞二が困つたような顔をして言つた。

「でも米倉さんは興味なさそうだし、他の先輩達も自分から何かするようない人達じゃないから、大人しくしてればまあ問題ないよ」

俺はそう言いつつも、先輩達が貞二のバックに少なからず恐れを抱いているのを知っていた。それはあえて言わなかった。

「俺は大勢でツルむのとか好きじゃないからなあ。特に、オレ強えぜオーラだす奴とは馴染めない」
と貞二が呟く。

俺はあんだだけバイクや車引き連れて帰ったヤツが何を言っているんだろうと思っていると、

「だって何が面白いのかよくわかんねえ。人から恐れられるってスゲー孤独じゃんか…」

暗い表情でそう言う貞二の横顔を見た。

そしてその言葉の意味を考えた。

確かに米倉さんはある意味孤独だと思う。口に出さずとも自然と他人を寄せ付けないオーラがある。それはいきがった態度とは違う。関係ない人に対して無関心というか、なんというか…。

少ない脳みそで考えてた俺はいつの間にかポケットに手を突っ込んだまま立ち止まっていた。

貞二が気付き振り返る。

目が合った。

冷やかかで何に対しても興味がなさそうな、寂しく悲しげな目をしていた。

ふいに俺は思い出し、言った。

「お前、人生つまんねーんだろ…」

「ああ…、かもな」

ちくしょう…俺の時と違ってかっこいいじゃねーか。

俺が心の中でそう悔しがっていると、

「でもさ、お前も俺と同じだと思ってたのに…、最近楽しそうだな」

「だろ？羨ましいべ？」

「…ちよつとな。だから今日話しかけたのかもしれない」

意外と素直な奴だと思った。俺はなんとなく好感が持てた。

それからたわいもない話をしながら帰った。

結局、あの事件については聞かなかった。

まあぶつちやけ途中からどうでもよくなって忘れてた。

だって目の前にいる貞二が俺に映る全てで、そいつは俺と似た目を
持つイイ奴だった。

ただそれだけのことだった。

それ以来、貞二とは教室で話をするようになった。

だが米倉さん達の所にはそれっきり貞二が顔を出す事は無かった。

結局米倉さんは、貞二のヤンキー事件について卒業まで聞いてこ
な
かった。

周りの先輩達は気になっていたようで、俺にしきりに聞いてきたが

「よくわかんないっす」

と答えたためそれっきりになった。

そしてその事件について直接貞二から話されたのはずっと後のこと
になる。

学校での日常

今は俺と馨と貞二の3人を中心に常時10人ぐらいで行動する事が多い。

その日もいつものように屋上でタバコを吸っていた。

相変わらず、女ツけはゼロ。男子校だから当たり前だ。

馨は壁にもたれながら、もらったヤンマガを読んでいる。

貞二は他の奴らと昨日テレビでやっていた格闘技を再演して楽しんでいる。

俺はというと最近知り合った女がウゼえ、と周りに嘘を付きつつメールを打ちまくる。

プーさんのぬいぐるみが欲しいと返ってきた。そーいや誕生日が近かったな。

「馨、午後からゲーセン行かねえ？」

話しかけると、ヤンマガを読む手を止め、ちょっとときどきながら言ってきた。

「えっ、で、でも次、キャサリンの授業だぞ。」

キャサリンは英語の若い外人教師で、女がいない男子校にはとても重要な授業だ。

そして馨はひそかにキャサリンに惚れている。

男子校では好きな女がいてもあまりそれを表さない空気がある。

ただでさえ出会いが少ないから大半は彼女がいない。だが興味はある。

潜在的にみんな近くの女を意識している。したがって抜け駆けは許されないのである。

そして授業をサボると唯一の接点を失う事になるのだ。

そんな俺も、ひそかに音楽の片瀬先生がお気に入りだ。

高校に入り選択科目を選ぶ際、音楽と決めていた。

でもその時は、まだボケジジイが担当教師だった。

だが、桜も完全に散る頃になるとジジイも病気で学校を辞めた。後任の教師は音大を出たばかりの22歳の女だった。

音楽を選ばなかった奴らはこの世の終わりのごとく嘆いた。

片瀬先生との会話はある種、音楽を選択科目に選んだ奴の特権になっている。

おかげで音楽の授業は今のところ皆勤賞だ。

そして、馨にとってのキャサリンの授業の重要性を熟知している俺は、強く誘えなくなった。

「まあ、一人で行ってくるわ。」

そう言っていると、馨は困った顔をした。

そして色々と葛藤し天を仰いだり、こっちを見て何か言いかけた。ただどうまく言葉が出てこない。

馨はすごく優しい奴だ。いつも何でもいう事を聞いてしまい、頼まれると断われない性質なのである。

俺はそんなこいつの性格が好きだ。

「わかった、わかった。キャサリンをからかってからでいいから、一緒に行こうぜ。」

俺がそう言っていると、安心した顔を浮かべたと思ったら、申し訳なさそうに

「ご、ごめん。」

と言った。何か無性に可笑しくなり二人で笑った。

タバコを排水溝に投げ捨て教室に戻った。

ゲーセンで逆ナン？

「外人のセックスってやつば、激しいのかな？」

馨がUFOチャッチャーをしながらアホな事を聞いてきた。

「それはキャサリンの事か？でもやつばAVは演技なんじゃね？つてゆーかあんなでかい声出されたら萎えるよ。あ、ちよい左……」

俺は横から指示をしながら答える。

「忍は、外人とやった事ある？」

「やった事は無いけど、前にホームステイに来た姉ちゃんがめつちやアクティブに迫ってきたな。」

1年前にうちの親が留学生を受け入れた事があった。

「マ、マジ？うちは男だったからなあ……。んで、どこまでいったの？」

俺らの学校はアメリカの学校と提携しているので、交換留学生を受け入れる家庭が多い。

来年には俺らもアメリカに修学旅行をし、ホームステイする予定になっている。

「入れる直前に親が帰ってきてマジ焦ったわ。それ以来、ジューデイがアメリカ帰るまで二人つきりって状況はなくなった。」

「うわー、生殺しじゃん（笑）」

「マジ、もったいない事したわ。ところでホームステイしてた人と連絡取ってる？」

「俺のそこは、男だったからそれつきりだな。興味ないし。忍は？」

「全然。英語苦手だし。あつ、きたー！」

ガタン。本日3つ目のぶーさんゲット。

馨は天才的にUFOチャッチャーがうまい。これまで幾度と無くナンパした子にあげて来た。

あがり症の馨はナンパした子からの反応が鈍い。緊張でしどろもどろになるから会話が弾まない。

最初は変な奴に捕まったと思われることも多いが、この特技のおかげですぐに挽回できる。

もともと背も高いし、顔も良い。性格が滲み出てるような優しそうな顔立ちなのである。

しかも最近はお馴れしてきている始末。

なので、最近数少ない俺の知り合いの女の子からの人気も高いのがちょっと悔しい。

「お兄さん達、めっちゃうまいね。」

突然後ろから声をかけられた。

振り向くと二人組の女の子が近づいてきた。

女の子といっても、20代前半といった感じだった。まあ俺らにとってはお姉さんだ。

しかも可愛い。こんなラッキーを逃したら確実にバチが当たる。何とか会話を続ける。

「いや、うまいのはこいつすよ。俺は基本指示役。」

「しかもあんまり役に立ってない感じで。」

と、すかさず髻がつっこむ。

「バツカ、俺のコインを投入するタイミングは絶妙だって、ばくざん先生に褒められたし。」

「コインかんけーねーし、ばくざんって古っ!」

もう、二人してテンション高いのがバレバレだったけど、お姉さん達は笑ってくれた。

逆ナンされたのなんて初めてだし、内心ビビってる。髻もビビってるみたいだ。

「お願いがあるんだけど、聞いてくれる?」

夏を先取りしたような格好のB系のお姉さんが言ってきた。

どうやらDonaldのぬいぐるみが欲しいらしい。

速攻で髻がつってやる。

「君達学校は?終わるの早くない?」

今度は清楚系のお姉さんが聞いてきた。

さすがに補導員には見えないけど、いつもの癖で、

「試験前だから学校は午前中で終わりっす。…あ、うそっす。サボりっす。」

途中から、バカらしくなって言い直した。

「なるほどね。そうやってかわすんだ。君達、いつもサボって遊んでるんでしょ。言い方が慣れてるぞ。」

B系のお姉さんが鋭い指摘をしてきた。

そのあと、一緒にプリクラとってマックに行った。

B系のお姉さんは八木沢美波さん。清楚系のお姉さんは三上百合さんといった。

二人は短大の時の友達で今は社会人の26歳だった。

実際は二人とも20歳くらいに見えたためちよつとビックリした。

俺らも簡単に自己紹介して、飯食って、番号交換して別れた。

いつもだったらカラオケ行ったり、ボーリング行ったりするのに、なぜかずっとマックで喋ってた。

たぶん、このぐらいの年齢の人と遊んだ経験がなかったから、

ドコにいけばいいか分からなかったのかもしれない。

「何か変な感じだな。」

帰りの電車の中で馨がつぶやく。

「ってゆーか、ビビッたよな。」

「俺、どうしていいか分からず、ずっとお前頼みだったよ。」

確かにそうだった。馨は俺との会話になりがちだった。

「もっと話振れよ。最近結構がんばってたのに今日はどうした？」

馨は何か言にくそうにしていたが、ふいに

「百合さんってめっちゃ可愛かったよな。俺、緊張してて…」

あ、こいつ惚れたな。

「マジか。お前キャサリンどうすんだよ。」

「別にキャサリン俺のもんじゃないし。ライバル多いし。」

「ヤリマンだしな。」

「ヤリマン違うし。えっ？ヤリマンなん？」

「さあ？」

「もう、何だよ。キャサリンかあ……。」

馨はキャサリンと聞いてまた無口になった。

これまで女の事で思い悩むという経験は俺には無かった。

「ってゆーか、お前ホント年上好きだよな。」

「来る者拒まずの忍には言われたくねーし。」

確かに、俺は貴重な出会いを大切にしてきたために、

好意を持ってくれる子が俺のタイプという最悪な発言を仲間内でしている。

基本的に本気で好きになった女なんていなかった。

「でもまあ、相手にされないだろうし、引き続きキャサリン狙いでいいんじゃない？」

「えっ、やっぱ無理かなあ。」

「当たり前だろ。俺ら金ねーし、ガキだし。ただ دونالد が欲しかっただけだろ。」

馨は舞い上がっていたが俺は結構冷静だった。

最近でもよく米倉さんに遊びに誘われ年上の女性と会話する機会が多いが、

高校一年生の俺の事を男として見る人はいなかった。

ってゆうか基本的に米倉さんの事を好きな人が多く、

俺はその人たちの恋愛相談につき合わされるってゆーのがパターンになっていたせいもある。

結局それ以来美波さん達とは、連絡は取り合うが会う事は無かった。なぜなら普段勉強しない俺らには地獄のような期末テストが始まってしまったからだ。

そして高校生活最初の夏休みに突入した。

嵐の前の追試

私立の学校の夏休みは早い。

7月の初旬には期末テストが終わり、終業式まで自由登校日というわけのわからない期間が続く。

この時期、受験期の3年生は学校で集中合宿が組まれるが、1、2年生には夏休みと変わらない。

しかし、俺には追試という重要な祭事がある。

追試といっても期末で出た問題を8割以上正解すれば赤点ギリギリの成績がもらえる。

模範解答を丸覚えするだけだ。

大学の推薦を狙っている連中以外はこの追試で辛うじて高校を卒業する仕組みになっている。

この日も自由登校日に半強制的に登校し追試を受けていた。

俺らのグループの中で受けていないのは貞二だけだった。あいつは基本的に頭がいい。

いつも俺らと一緒にいるのに要領よく勉強しているみたいだ。

最後の教科の数学で、数字まで覚えたとおりに書いている時、貞二からメールが来た。

その場で見えるわけにもいかず、速攻で書き終え教室を出た。

「今日、真央ちゃん達とカラオケ行くけど何時ごろ来れる？」

こいつのメールはいつもこうだ。俺に予定がないと決め付けてやがる。

実際、何にも無かったが悔しいので

「今日は馨とバイクのパーツ直す予定になってるけど。」

女関係の予定にできないのが寂しい限りだ。

「マジか、聞いてないぞ。俺も直したいパーツあるんだけど。」

馨は俺らのエンジニア的な位置づけで、しかも最安で手を加えてくれる貴重な存在だ。

「ああ、残念だな。今決めたんだ。お前が真央を落としたのなら、自分の力でやれよ」

「そんな事言うなよ。お前来ないと無理だよ。まじ頼む。」

中村真央は俺の小学校の同級生で卒業以来疎遠になっていたが、高校に入り地元の奴らも電車で通学するようになると、駅で会う事が多くなった。

最初はたまにしか会わなかったが、そのうち俺の乗る電車の時間に合わせるようになってきた。

俺に気があるのかとヤキモキした時期もあったが理由は別の所にあった。

最近変な男に付きまとわれているらしく、登校する電車で待ち伏せされる事もあったみたいだ。

そんな俺とたまたま一緒に通学した時これは安全だと思ったらしい。

なんせ次の駅では髻が寝ぼけ眼で乗車してきて、次の駅では貞二がという具合に続々と仲間が合流するために、俺らの周りにはどんな満員電車でも半径3メートル以内には誰も近づいてこないからだ。

まあ、ボディガード的な意味合いが強かったが、そのうち貞二が惚れてしまった。

真央がバイトで遅くなった時はバイクで家まで送ったりしているらしい。

真央も薄々は気付いているみたいだが、輪を崩すのがイヤなのか、他に好きな奴がいるのか知らんが、態度をハッキリさせていなかった。

多分この日も「みんなと一緒にならいいよ。」と言われているようだ。取り合えず、貞二のメールを放置して髻を待っていた。

しかし続けて貞二から送られてきたメールを見て心が動いた。

「今回はいつものメンバーじゃないってよ。」

いつものメンバーとは真央と一緒に登校する女の子達の事だ。

でも、その子達の中から彼女を探そうと思う気になれなかった。

しかも毎日会っている為今さら遊ぼうとも思わない。

中でも鹿取夕子は俺の携帯番号を聞いてきたり、今度一緒に遊びに行かないかと言ってきた。そういう時もやんわり断ってきた。

なぜなら基本的に俺は女の子を本気で好きにならない。

が、何となく付き合うという事は今までもしてきた。

だがここでそれをやってしまうと、イヤでも毎日顔を合わすわけだし、真央と夕子の関係にも影響するだろう。

そうなると思んどくさい事になるのは目に見えている。

しかし、違うメンバーと言われれば話は違う。

多分、貞二もそのことを見越して真央に頼んだようだ。

どうしようか悩んでいると馨が追試を終えて合流してきた。

他の奴らは開放感いっぱいであるのに対し浮かない顔をしていた。

「どうした？しくったん？」

「いや、キャサリン夏休み中はアメリカに帰っちゃうらしい…。」

相変わらず、キャサリン命だ。

「別に個人的に会えるわけでもねーべ。そんなに落ち込む事じゃなくね。」

「いや、偶然街で会う事も無理じゃん。」

「そりゃそうだけど、それって関係あるか？」

「いや、街で会えば違った感覚になるかもしれないじゃんか。俺も制服じゃないんだし。」

「そっか、チャンスだったのに残念だったなあ。ところでさ、貞二がカラオケ行かないかって言ってるけど、どうする？」

「バカらしくなって馨の言葉を否定するのはやめ、本題に移った。」

「カラオケって、また真央ちゃん達とだろ？金かかるし、俺パス。」

「真央も来るみたいだけど、他はいつものメンツじゃないんだって。」

馨の顔色が変わる。さっきの俺がこんな表情をしてたと思うと何か恥ずかしくなった。

「貞二も俺らが行かない事は想定してなかったらしく、もう誘っち

「やっただって。どうする？」

「しょうがねーな。今月金ねーのに。」

「ホントにしょうがねーよ。」

そうばやきつつ、ウキウキしながらいつものカラオケに向かった。

カラオケ合コン

俺らが到着した時にはみんな集まっていた。

貞二と真央と女の子2人。二人は中谷瞳ちゃんと今井明日香ちゃんといった。

明日香ちゃんはナイスバディの持ち主で日サロ焼けした元気な感じの子だ。

瞳ちゃんはモデルのような体型で美人タイプだった。しかもどっかでみた事ある気がした。

二人とも真央の高校のクラスメートで最近よく一緒に遊ぶらしい。

真央が俺らの事を紹介してくれた。

「この見るからにアホっぽいのが忍君で、かつこいいのが馨君」

おおい、そりゃねえよ、ねえさん…。

しかし女の子達には

「たしかに…」

という顔をされてしまったため

「ちよっ、ヒデッよ。しかも納得されてんし…」

と貞二のほうを見ながら、自嘲気味に言ってみた。

すると笑いをこらえつつ貞二がフォローしてくれた。

「まあ、ケツに花火さして走り回るのはこいつぐらいだよ」

「おまつ、あれ先が細いからケツかなりいてーんだぞ」

と、俺が慌てた様子で返すと

「いや、そこは花火の熱さを語るべきだろ」

と、馨が冷静に突っ込む。

結局、この間みんなで行った花火の話に持っていく感じになった。最初引いてたけど、その時の携帯動画を見せたらさすがに爆笑だった。

全然フォローになってなかったけど、まあその場は和んだ。

カラオケに行くと貞二と真央、馨と明日香ちゃん、俺と瞳ちゃんとペアを組んで歌うという感じになった。

自然と瞳ちゃんとよく話した。

瞳ちゃんは結構有名な雑誌モデルだった。どうりでみた事ある気がしたはずだ。

撮影の話やモデルの人たちの話を楽しそうにしてきた。

俺には全く縁の無い話だし、知らない世界の話は聞いていて楽しかった。

そして俺は学校での苦労話や笑い話をした。

体育の後の授業は基本上半身裸で受るとか、

屋上の排水溝にタバコ捨て続けてたら、台風来たときに最上階の屋根が抜けて吸殻が大量に落っこちてきた話や、

その後、疑わしい生徒が呼び出し食らって職員室で正座させられた話など。

その度にケラケラと笑う顔がとても可愛かった。

その笑顔を見ながらこの子は相当モテるんだろうなと思いながら時間はあっという間に過ぎていった。

そして俺がトイレに行った帰り、通路で真央が待っていた。

何故か不機嫌そうだった。

「どうした？生理か？」

「あほか。それより今日の忍君、何か楽しそうだね」

「そう？まあがんばってるかもな。俺、基本ビビリだから。相手につままないって思われるのやなんだよね」

「ふーん、そう。ほんとにそれだけ？」

「何だよ。意味深だな」

「別にいい」

そういつて真央は女子トイレに消えていった。

ちよっと気になったが、俺の歌う順番のほづがもっと気になってしまつて急いで戻った。

その後、若干真央の視線が気になったが、相変わらず瞳ちゃんを楽しませつつ、会話の弾まない、馨と明日香ちゃんを交えて盛り上がった。

夕方の公園

結局延長につぐ延長で4時間が経ち、カラオケを出る頃にはあたりは暗くなっていた。

真央はこの後バイトがあるらしく、それまで時間を潰したいと言いつ出した。

どうしようかと貞二がみんなに投げかけたが、積極的な返答は誰からも帰ってこず、だからとその場で5分ぐらいが経ってしまった。その時、そばを通った女性と目が合った。

見覚えがあつた気がしたが誰か分からず、目で後を追ってしまった。その女性もびつくりした表情で振り返りながら歩いていった。

おれはあつと思つて思い出した。

あの時ゲーセンで会つた美波さんだった。

会社帰りだったのか、スーツっぽい服装で同僚らしき人達と歩いていた。

お互い連れがいるので会話をする感じではなかったが美波さんが手を振ってきた。

俺はその雰囲気の違いに驚いた。譬にいたつては全く気付いてなかった。

とりあえず、はにかみにも似た笑顔を作りつつ、小さく手を振った。「誰？」

すかさず真央が聞いてきた。

「え？ああ、…知り合い」

「当たり前じゃん、見ず知らずの人が手振るわけ無いじゃん。そーじゃなくて。友達？」

俺は結構見ず知らずの人に手を振られる事はあつた。

この間電車で窓際に立っていた時、駅の反対方向の電車から女子高生二人組に手を振られた事もあつたし、米倉先輩がクラブに連れて行ってくれた時も知らない女性と目が合うと手を振られた。

「別に。友達ってゆーか、普通に知り合いだよ」

実際友達とは思えなかった。

一度しか会った事無かったし、年も離れてるからかも知れない。

「あ、もしかして彼女？」

明日香ちゃんが突拍子も無い事を聞いてきた。

普通に否定すればよかったのに、何故か慌ててしまった。

「あつ、やっぱり彼女だ」。大丈夫？こんなとこ見られて」

女って何でこうなんだろう。ホント野次馬とおせっかいが特技だよなあ。

「ってゆーか、馨も知ってるべ？あれ美波さんだよ」

たまらず馨に助け舟を求めた。

「は？マジ？」

おおい、こいつホントに気付いてなかったんか…。

結局俺はどーゆー知り合いかはうやむやにして公園へ行こうと言った。

と同時に歩き始めたため、やむなくみんなついて来た。

途中のコンビニで飲み物とお菓子を買っているとメールがきた。

＜偶然ってすごいね～。まさかまた会うなんてね。ちよつと感動したぞ＞

＜マジ、びっくりすね。しかも最初気付かなかったすよ。めっちゃ大人っぽいし＞

＜はは、一応社会人なもんで。でも気付いてくれて良かった。気付かれずに手を振り続けてたらバカみたいだったから＞

＜馨は気付いてなかったすよ。あとで教えたらきよろきよと探してましたもん＞

＜えゝ、ちよつとショック…。でもしょうがないか。馨くん初めて会った時も百合ばっか見てたしね＞

＜え、そんなことないんじゃないすか？あいつ緊張してたみたいだし。ぶつちやけ俺も緊張してました。ホントはもつと話したかった

んすけどね。美波さん達キレイだし>

<あははは。ありがとう。最近そんな事言ってくれる人いないから素直にうれしいぞ。でも馨くんが百合狙いなのはバレてるから、気にしないで。私には全然メールくれないけど百合とは結構連絡取ってるみたいだし。だけど忍君はぜんぜんメールくれないよね>
初耳だった。あの野郎、意外とやるな。

<美波サン達は社会人だし、忙しいと思ってあんまりメールしなかったんすよ。ホントは連絡を心待ちにしてたんすけどね>
と、ずさんな性格をごまかしてみた。

<んゝ、分ってないなあ。女の子からメールとかってなかなかできないもんだぞ。でも忍君はモテそうだし、おばさんにかまつてる暇はないのかな?>

モテてたらこんなにカラオケ張り切らないつつーのと思いつつ、
<そうだったんすかあ。あゝ、俺こんなんだからモテないんすよね。基本ビビりなんで。しかもおばさんだなんてそんな全然思ってた。いっすよ。美波さんこそキレイだしモテそうだし。相手にされないのは俺のほうすよ>

<じゃあ、今度は気軽にメールしてね>

<了解すゝ。今夜にでもまたメールします>

<はい。期待しないで待ってまゝす>

脈があるんだか無いんだか分らない感じのメールのやり取りが終わった頃にはコンビ二から公園に移動し、俺はブランコで携帯を閉じた。

タイミングを見計らったかのように真央が隣のブランコに座った。

「忙しそうだね」

さつきからやたらトゲのある言い方が気になる。

「どうしたん?何か今日変だぞ?」

「別に…。携帯見ながらニヤニヤしてる人に変とか言われたくない」
そう言っただけで黙った。

無言の空気に耐え切れなくなり、聞いてみた。

「そーいえば、最近貞二とイイ感じじゃん」

「…、告られたよ」

はい、地雷踏んでしまいました。

なるべく冷静を装いつつ話を続けた。

「そう。え？いつ？」

「…、さっき」

はい、すかさず2発目も。さすがに狼狽した。

「そ、そっか。でどうするん？付き合うの？」

「どうしたらいいかなあ。忍君はどう思う？」

「どうって…。お前次第じゃないの？」

このあたりから俺の中で変な考えが頭をよぎった。

（もしかして俺に気があるのか…？）

内心ドキドキしながら真央の言葉を待った。

「それはそうなんだけど、それで忍君はいいの？」

言葉に困った。俺の中で恋愛感情は意識して持たないようにしてきた。

だから真央に対しての感情もこれまで考えた事も無かった。

俺はふいに考え込んでしまった。

見かねた真央がまた話し出した。

「忍君はすごいよね。私らに対して平等に優しいじゃん。何かホントに仲間って感じがする。でも他の人は違うもん。誰かしらに特別な感情を持っているのがたまに見え隠れするんだよね」

「まあ、普通はそうなんじゃない？俺は優しいんじゃないと思う。

人に対する愛が足りないってゆーか…」

「ううん、そうじゃない。夕子から聞いたけど、中途半端に付き合うことできないって断ったらしいじゃん。私は寂しがり屋だし、その時他に好きな人がいなかったらこの人でもいいかなって思っちゃうことあるから」

「いやいや、俺だってたまにそうゆう時あるぞ。ただ夕子ちゃんに

関してもそうだけど、お前らはそうゆう存在じゃないんだよね」

「そうゆう存在って？」

「いや、何っーか、みんな揃ってる方が安心するってゆーか。それぞれが特別だから関係がこじれたり疎遠になったりするほうが辛いし」

「ああ、何か分かる気がする」

「それより、ちゃんと貞二の事考えてやれよ。あいつだってバカじゃないからそれくらいの事は考えてるはずだよ。それでもお前に告ってきたんだろっし」

「そうかなあ」

それっきり真央は話さなくなった。

そして俺はさつき頭をよぎったうぬぼれた考えを恥じた。

みんな普通に接してる風に見えて色々考えてる事にも戸惑った。

俺はそうゆう感情の蚊帳の外に置かれてる気がして急に自分が子供っぽく感じる。

貞二のほうを見た。髻とハイタッチしているのが見えた。

多分、馬鹿なことやって瞳ちゃん達を笑かしてたんだろう。

ふと貞二と目が合った。なにやら気まずそうに笑うのが見えた。

「それよりさつきは貞二に何て返事したんだ？」

みんなのほうを向いたまま話しかけた。

「いきなりだったし、ちよつと考えさせてって……。ホントは迷ってるの」

その言葉がみようにひっかかった。俺は真央のほうに向き直り、

「おいおい、ホントにいきなりだと思ったんかよ。ってゆーか、態度見てれば分かるじゃん。もっとあいつの事考えてやれよ。バイクで送ってもらったり都合のいいように振り回すなよ！」

真央はうつむいたまま何も言わなくなった。

俺は言った後にちよつと後悔した。なぜなら真央の気持ちも分かるストーリーに困ってる真央にとっては仕方ないのかもしれないからだ。

「ごめん、言い過ぎた。だけどそーゆーのって、勘違いするもんだからさ。特別な存在なんじゃないかって。基本的に男はバ力で単純だから…、」

「私だって…、」

そう言っただけの言葉をさえぎった。

そして顔を上げ、こっちを見ると思いつめたような顔をした。

「私だってあの時…、忍君が送ってくれると思って話したのに！でもあなたは私を特別な存在には思ってくれなかったじゃない。…もういい、行くね！」

そう言っただけで立ち上がった。

俺は何も言えなかった。今のが告白だったのかさえわからなかった。真央はみんなに

「もうバイトの時間だから先行くねー」

と明るく言っただけのほうへ歩いていく。

「えーっ、まだ全然時間あるじゃん。どーしたのー？」

と慌てて女の子達が後を追った。

馨と貞二は俺と真央達を交互に見ながらどうしていいかわからずにいた。

とりあえず馨が

「じゃあねー。ばいばい」とでかい声で叫ぶ。

瞳ちゃんと明日香ちゃんが振り向いて手を振っているのが見えた。

俺らは彼女達が見えなくなるまでその場でばーっと思送った。

反省会

「話をまとめると、貞二は真央ちゃんが好きだったけど、真央ちゃんには忍が好きだったと…。」

真つ暗になった公園で馨が状況を納得したようにつぶやき、

「んで、忍は貞二のことが好きだと…」

「それはない。」

俺と貞二が同時に突っ込んだ。

「息ぴったりじゃなか」

馨の言葉でみんな笑った。

女の子達が帰ってから一時間くらい経った。

灰皿代わりの空き缶には大量の吸殻が溜まっている。

「てゆーかさ…」

馨がセッターに火をつけ一息入れると、

「忍も貞二も鈍感すぎなんだよ。真央ちゃんの態度見てればわかんじゃん。貞二ももうちょっと時間かけてから告るべきだし、忍も貞二の気持ち知ってんならその辺考えて行動してやれよ。」

馨はこういうところが優しい。俺と貞二の気持ちを代弁するために、あえて言いにくい事をはつきり言ってくれている。

「ってゆーか、せっかく明日香ちゃんの番号ゲットしたのに連絡しづらいじゃんか。どーしてくれんだよ。まじで。」

さりげなく本音が出る。こういうところが憎めない。

「別にその分、百合さんとメールすりゃいいじゃん。」

俺が知ってますよという顔を見ると、馨はバレたかという表情をしたが

「百合さんはガード固そうなんだよ。その点、明日香ちゃんはイケそうじゃん。」

「お前、俺らが修羅場ってるのにホントお気楽だなあ。」

貞二はしょうがねえなという顔をしながら馨を小突いた。

馨はオーバーに痛がるそぶりをしながら

「とりあえず場所かえよーぜ。俺んちで飲み会するか？」

「いいな。」「賛成。」

と即決で馨んちに直行した。

宅飲みの夜

馨の家に着くと、ジャージとスエットに着替え、コンビニで酒を買い、飲み始めた。

馨は明日香ちゃんからメールが入ってきたのでテンションが高い。いつも以上にガンガン飲んでひたすらアホな事を言い続けていた。馨は酔うと勝手な行動が多くなる。

今日もやたら陽気に「めっちゃ楽しい！」を連発しながら飲みまくっている。

会話の途中でおもむろに、

「ロン、三色一通イーペーコー、多牌！」

と言いながら、腹を抱えて一人で笑っていたりする。

そんな風にして飲んでいるといきなり、

「明日香ちゃんにメールするわ」

といってベッドでメールしてたと思ったらすやすやと寝てしまった。嵐のようだった空気がすつと静かになった。

「ほんとこいつアホだなあ」

と俺は馨の方へ目を向けた。

すると貞二が

「まあ、でもいい奴だよ。こうやって俺らに話す時間と場所を自然と持たせるために、明るい空気作ったりさ」

「そーかあ？そこまで考えてんのかな？」

「だってまともにシラフで話し合えよって言われてもそんな気になれないだろ」

確かに、公園で話してる時は言いたい事も言えなかったが今なら言えそうな気がする。

こうゆう時、馨も貞二も大人だって思う。

「やっぱ俺は鈍感だな。そーゆー事に全然気付かないもんなあ」

「いや、多分忍はそーゆー事意識しなくても自然とできるから気付

かないだけだろ。俺はいちいち考えないと行動に移せないんだよ。だから人のやることが見えやすいだけ」

「まあ、お前頭いいしな。追試組とは違うよ」

「別に勉強できるからって頭いいとは限らないだろ！」

貞二はちよつと怒ったように言った。

学校の成績を引き合いに出されるのは嫌いらしい。

でも、勉強ができない俺にとっては心底尊敬してるんだが、それを言うとなんか誰に対しても自然体で好かれるお前のほうがよっぽどうやましいと返される。

「しかも、頭がよかつたらこのタイミングで真央ちゃんに告つたりしないし」

いきなり本題に話題が移る。

「俺も聞いた時びっくりした。それよりどうしてこのタイミングでなん？」

「それは……」

貞二の言葉が詰まった。いつも冷静に物事を説明する事に長けてるこいつにしてはめずらしい。

「ホントは忍には言いたくなかったけど」

ポツリと言った後、言葉を選ぶように続けた。

「真央ちゃんと話しても忍の話題ばかりなんだよ。俺は夏までが勝負だって決めてた。たぶん俺の気持ちも伝わってたと思うけど、あの子なりに俺と忍の関係を考えてくれたと思う。だけど真央ちゃんのことで俺らの友情がこじれることは無いって分かってたから、これ以上真央ちゃんにあれこれ考えさせるのは悪いと思ったんだ」

俺はバカだ。結局みんなを振り回していたのは俺だった。こーゆー時、どうしたらいいか全然わかんない。

「何でかな。俺そんなに思わせぶりなことしたかな」

「そうじゃない。人を好きになるって相手がどうこうじゃないだろ」

「俺、そうゆう経験が無いから分からない」

「おまつ、恋愛した事無いのかよ。誰かを好きになった事ねーの？」

「本気で好きになった事ってないんだよね。」

「それって…。ちなみに女と話してて異性と会話してるって意識はあるだろ？」

「別の生き物だって感覚はあるけど、んゝあんまり…。」

「…、忍が何でモテるのかなんとなく分かる気がするわ」

「勝手に納得するなよ。結構悩むよ。付き合っても愛が感じられな
いって言われて別れたり…。もっと想ってよって言われたり。俺、
嫉妬心とか独占欲とかってあんまり感じないんだよね。」

「そりやそうだよなあ。結局そこまで好きじゃないって事だろ？も
しかして忍自身が自分で自分を好きじゃないだろう？」

「好きじゃないかも。まああんま考えた事無いけど。でもそれって
関係あるんか？」

「大ありだよ。だから忍は自分の事より周りを大切にするんじゃない
か？それは男とか女とか関係なく。それを壊してまで誰かに対し
て突っ込んで好きになるてゆーのを避けてるんじゃないかなあ」

「お前すげーな。たぶんそう。仲間内で恋愛しようと思わなければ
それができちゃう。んでも、俺の大事な奴らがピンチだと恋愛とか
友情とか関係なく全力を傾けられる」

「確かに見ててそんな感じするわ。どんな時も利己的に振舞うって
ゆーのが皆無だわな。忍って不思議だよな」

「俺は不思議ちゃんですか？」

自分のコンプレックスを晒すのは恥ずかしい。

「だけど貞二は妙に納得した顔をしている。そして何かを決心したよ
うに話した。」

「やっぱ、真央ちゃんをお前に惚れさせておくのはやめた。いや、
惚れさせるのはいい。ただ恋愛対象にさせるのは可愛そうだ。だか
らこれからもガンガンアタックしていく。俺は自分大好きだし、利
己的だしな。ただ、忍が作りたいフィールドは守っていくよ。いま
で居心地が良かったのは忍がずっとそーゆー気持ちでみんなを取り
まとめてたからなんだよな。確かにみんなが好き勝手やって、ま

とまってこれたのは忍のおかげだよ」

貞二はいつもの感じに戻っていた。

「やっと、気付いたのかよ」

いつの間にか馨が目覚ましていた。そして話し続ける。

「だいたい女は最初は、こいつにホレんだよ。んなもんこいつ見てればわかんじゃん。だけど女だつてバカじゃないから、コイツと付き合ったら大変だつてそのうち気づくんだよ。だつてメールはたまにしかないし、常に女の噂が絶えないし。俺にはあえて軽い奴にみせてんのかと思うくらいだよ」

「平気でデートすつぽかして俺らのケンカ混ざりにくるしな」

貞二が思い出したように言う。

馨が続ける。

「そうそう。だけど逆にケンカになった時、俺らが誰かと待ち合わせしてる事知つてたらどんなに数足りなくても呼んだりしねーよ。カッコイイ事言う奴はいっぱいいるけどカッコイイ事できる奴なんてそんなない。誰だつて自分が可愛いし。特に女なんて自分を一番に想ってくれる奴を最終的には選ぶじゃん」

「でもそんなんで対等な友達とはいえなくね？」

馨と貞二の立場がいつもと逆転している。

俺のことを言われているのに全然実感がわかず、ただそのめずらしい構図を眺めていた。

「だ〜から、忍はすべてを犠牲にできちゃうんだつて。だけど俺らには無理だろ。だからつて友達やめるんかよ。要は使い分けだよ。自分の都合を優先する時としちやいけない時。その見極めをしつかりすればそれでいいんだよ。ただし、絶対忍を一人ぼっちにはしない。どんな時も誰かがいてやる。そして必ず忍の元に戻ってくる。それさえ忘れなけりやそれでいいんじゃないの？なあ」

そういつて馨は俺の方を見た。

「う、うん。よろしく願いします」

俺はゆりかごで守られてる様な気がしてそんな言葉が出てしまった。

「なんじゃそりや。ま、そーゆーことなんじゃねーの」

「んゝ、わかった。じゃあそれで」

俺は何の話をしてるのかも、これから真央達とどう接すればいいの
かも一向にわかんなかったんですけど。

そんな話をしていると鳥の鳴声が聞こえてきた。

夏の朝は早い。すっかり夜も明けていた。

気付くと焼酎の空き瓶が1本転がり、2本目も残りわずかだ。

ぐでぐでになりながら、さつきから同じような話をもう何度も繰り返
返しているような気がした。

そしてそのうち寝てしまった。

朝のグレイプフルーツ

メールの着信音で目が覚めた。が、ボーっとして止めるのが精一杯だ。

一呼吸おいた後、やっとの思いで携帯を開く。

「美波」

その文字で一気に目が覚めた。起き上がると地球の自転を感じるがごとくクラクラする。

隣では仲良く馨も貞二も爆睡中だ。

恐る恐るメールを確認する。

<おっはよ。昨日やっぱりメールくれなかったねえ。でもしょうがないか。忍君ならほかに返さなきゃいけないメールいっぱいありそうだもんね。そのうちまたメールちょうだいね>

時計をみる。12時35分。

普通の会社なら昼休みのはずだ。

<メール遅れてすいません。昨日は馨達と飲んでて、今起きました>ふらふらの頭を使い、やっとの思いでメールを送信する。

洗面所で顔を洗い、グレイプフルーツジュースを飲んでいるとメールが返ってきた。

<実は知ってたよ。昨日、馨君からメール来たもん。何か大変だったんだって?>

俺はボタンと携帯を閉じ、馨をはたき起こした。

うーん、と言いながらまたすやすやと寝入っている。

俺は馨の足元に移動し、丁寧に丁寧に馨の脚を交差させ、その間に俺の脚を差し込む。

そして思いつき身体を反転させながら、関節を極めた。

「起きろ、ボケー!」

「あだ、あだだだっ!」

その絶叫に貞二も目を覚ます。

脚関節を極めたまま俺はかまわず聞いた。

「お前、美波さんに何てメールしたんだ、ゴラァ！」

「べべ、別に何も。いてーって。話すから離して」

渋々、脚を放した。

馨は脚をさすりながら、残りのグレープフルーツジュースを一気に飲み干し、息を整えた。

「別に。何も言っていないよ。ただ、昨日会えなくて残念だったってメールしたただだよ」

「じゃあ、これは何だよ」

そういつて馨に携帯を見せた。

「ああ、それね。忍がメールくれないって言うから。友達と真剣な話してるしそんな状況じゃなさそうだよってフォーローしてやったのに」

「そんだけ？」

「そうだよ。内容まで話すわけねーじゃん。マジ痛てーし…」

「わ、わりい」

「もう、かんべんしてくれよ。ってゆーか、たまにはメールしてやれよ」

そういつて馨は俺の肩を小突いた。

その時、俺の携帯が鳴った。美波さんからだった。メールではなく電話だ。

俺ら3人は暫らく携帯の方を見て止まった。

「早く出ろよ」

貞二が痺れを切らしたように言う。

俺は電話に出た。

「もしもし」

「もっしもっし。おはよう。二日酔い大丈夫？」

「まだ頭イタイっすよ。ホント昨日はすいません。今仕事中華っすか？」

「いま休憩中。もうすぐ戻るけどな。それよりさあ、今日会える？」

「えっ？今日つすか。いいつすよ。時間は？」

「じゃあ、6時に渋谷の西武前は？大丈夫？」

「オッケーっす」

「よかったあ。あつ、もう戻らないと。じゃあまたあとでね」

「ウッス。じゃあ」

ピツッと携帯を切る音が聞こえて俺も切った。

「何か…、今日会うことになった」

俺に向かって刺すような視線で見守っていた二人に報告した。

「マジか。お前はホントうらやましいよ」

馨がやってられないという表情をしながらベッドに倒れこんだ。

貞二は俺のマルボロに火を付け一息入れると、

「そろそろ帰っかな」

と立ち上がった。

俺も帰ろうと思い立ち上がった瞬間、貞二の蹴りが飛んできた。

本気の蹴りではなかったが俺は半身で受け止めた為、後ろのラックにぶつかった。

「んだよ、てめえ！」

「うるせー！お前は片付けてから帰れや」

「何切れてんだ、てめえ！」

俺がつかみかかろうとした瞬間、馨が止めに入った。

「まあまあ、イキんなつて。落ち着けつて。貞二ももう帰れよ。なあ」

「おう…、わりい。…またな」

そついつて貞二は帰っていった。

半村家の人々

「あいつの気持ちも考えてやれよ。」

馨はその一言だけいってマンガを読んでいる。

俺だってわかってる。だけどどうすりゃいい。

俺に他に好きな人がいるんならそれでいいんだろっけど、そうじゃない。

今日もたいして好きでもない女と会おうとしてる。それが貞一的には気に入らない。

だからって修行僧のようにしてろってか。

それとも真央のことをもって考えてあげなきゃいけないのか？

女を本気で好きになれないこの俺が、親友の好きな奴を好きになれる訳ないだろう。

結局答えなんて見つからなかった。

「なあ、俺はどうすりゃいいんかな？」

俺が聞くと、馨はマンガから目を放さずこともなげに言った。

「忍が考えたって、どうしようもないじゃん。考えて行動できる奴じゃないんだし。それより今日美波さんどうするの？」

「ああ、どうしょ。」

「てゆーか会ってくれば？俺らなんかより全然恋愛経験豊富そうだし、相談してくればいいじゃん。」

なるほど、それもありだ。

俺の少ない脳みそであれこれ考えるより、女性の意見を聞いてみたいと思った。

そのあと、俺なりに今後の接し方を考えればいいしな。

「そうするわ。じゃ、俺帰る。色々ありがとな。」

「おう、今度何かおこれよ。」

「今度な。」

そういつて馨の部屋を出た。

実際おごった事はないんだが、お互いが常に対等でいられる合言葉みたいなもんだ。

一日ぶりに家に帰った。

ただいまも言わず、さっさと部屋に行く。

最近、親は何も言わなくなった。

もう学校と警察からの呼び出しさえなければそれでいいという感じだ。

父親はほとんど家に帰ってこない。

ゴルフ関係の仕事をしているため、週末は地方のトーナメントに行っているし、平日は次のトーナメントの打ち合わせで出張している。一年のうち300日くらい出張してるみたいだ。

だから全く家庭の事なんて気にしていない。

母親は俺への教育熱は冷め、兄貴と妹にしか興味がないみたいだ。

しかし兄貴はこの春から国立大学へ進学し一人暮らしを始めた。俺によく言うことは

「やりたいことやるなら、やることやって堂々と遊べよ。お前は中途半端なんだよ。」

確かにそうだと思う。だからやることだけはやっている。

当面の目標は留年せずに高校を卒業することだ。

兄貴がいなくなってから母親の目はもっぱら妹に向けられている。

しかし、中学受験は俺の失敗からか、妹にはさせなかった。

その分習い事をたくさんさせている。

ピアノ、バレエ、日本舞踊、茶道、華道。

その中でも華道は中学生にして師範クラス。

なぜなら母親が華道教室を自宅で開いているからだ。

とまあ、俺の家は絵に描いたような中流階級の家だ。

結局、この家で浮いているのは俺だけ。

俺は捨て子だったのではないかと思うときもあるくらいだ。

とりあえず部屋にあった着替えを持って洗面所に行く。

昨日から着っぱなしの制服を脱ぎ捨て、シャワーを浴びた。

バスタオルで髪を乾かしている時、瞳ちゃんからメールが来た。

「昨日は楽しかった。ありがとう。ところで真央と連絡取れないんだけど、忍君なんか知ってる？」

何て返そうか迷った。この感じだと瞳ちゃん達には何も言っていないみたいだ。

とりあえず当たり障りのない返事を返すことにした。

「こちらこそありがとう。また遊びいこう。真央の事は分からないなあ。ちよつと心配だし、一応連絡取れたら教えてよ。」

「わかったあ。でも私、これから撮影だからメールできないかも。

逆に忍君も真央と連絡ついたら教えて欲しい。」

「おう、わかった。撮影がんばれ。」

さすがにちよつと気になったが、俺が色々連絡するのもどうかと思いい、そのままにすることにした。

だって今時、一晩くらいどっかで遊ぶことだってあるだろう。

その後、いろんな奴からメールや電話が来たが、どれも遊びに行こうというものだった。

その度に予定があるから無理と断った。

何でこんな日に限ってと思ったが、昨日で追試が全て終わりみんな暇なんだと気付いた。

そのうち電話やメールがウザくなり、シカトした。

渋谷デート

だらだらと準備をし、約束の時間になった。

美波さんは仕事が長引いたらしく、ちよつと遅れていた。

俺はボーっと待っているのも嫌いじゃない。

ガードレールに腰掛け同じように待ち合わせをしている人を眺めていた。

みんな手に手に携帯を握りしめている。

何故かみんな不安そうに見えるのは気のせいかな。

そして待ち人が来るとぱつと表情が明るくなる。

男女のカップルはもちろんだが、取引先の会社員同士でも同じような表情をするのが面白い。

普段どんな苦手な奴でもその瞬間は表情が明るくなるもんなのかな。今度誰かで試してみよう。

そんなことをふわふわと考えていると、見慣れた人が近づいてきた。美波さんだ。俺の表情が明るくなるのを自分でも感じた。

「お待たせ」。忍君、私服の時は全然違うね。何か大学生みたい」

「いや、今日は落ち着いた感じにしてみました」

「あゝ、それは私を氣遣ってってこと？ふふつ、ありがとう。どこいこっか？」

「俺の知ってるところはガキっぽいっすよ。だから美波さんどっか行きたいところあります？」

「んゝ、忍くんに任せるよ」

ちよつとだけ思案した。

俺のレパトリーなんて、せいぜいマックかファミレスかドトールぐらいしか思いつかない。

おしゃれなバーやレストランなんて行かないし、払えるだけの金もない。

かといって今日の美波さんは会社帰りでスーツ姿。

俺は前に米倉さんに呼ばれていったことのある店を思い出した。

「ロコモコって食べれます？」

「あゝ、ハワイのね。好きだよ」

「じゃあ、そこで」

俺はかすかな記憶を頼りに歩き始めた。

幸運にも迷うことなく到着した俺らは、

店の前のメニューをちよつと確認した後、階段を降りていった。

店内は思いつきり夏だった。アロハを着た店員が元気にオーダーを取っている。

雰囲気間違えたかなと美波さんのほうを見ると、

「すごい、何かカッコイイ」

と感動してくれた。

俺は米倉さんに感謝しつつ、店員に促され席に着いた。

ロコモコとドリンクをオーダーしたあと会話がなくなってしまった。俺は美波さんをちゃんと見たのはこれが初めてだったかもしれない。メイクも服も髪型も前とは全然違う。大人っぽい雰囲気に少しの間見とれた。

「何か緊張する」

困ったような笑顔を浮かべながら美波さんが言う。

「俺もつす」

そついいながら話題を探した。美波さんも同じ気持ちだったらしく

「百合がね……」

と話し始めた。俺はちよつとホツとして話を聞く体勢になった。

「百合は最初、忍くんの事が気に入ってたみたい」

いつもこれだ。俺は全く気付かずにいくつもチャンス逃している。「初めて会った日も忍くんを見てかつこいいねって。じゃあ声かければって言ったらそんな事できないって。結局私が声かけることになつちやって……」

百合さんの清楚な笑顔が浮かんだ。美波さんは続ける。

「で、番号交換したのに、忍くんは全然連絡くれないって。そのう

ち馨くんからよくメール来るようになったみたい。たまに馨くんとは会ってるみたいよ。んで、今ではすっかり馨くんが好きになっちゃったみたい」

泣きなくなつた。昨日の馨の言葉の意味がよくわかった。

そして気付いた。おれはモテそうなだけで、実際はモテないんだと。そんな気持ちでいるとロコモコが運ばれてきた。

「どうやって食べるの？」

そう聞かれても、俺だって1回しか来た事がない。

たしか上に乗ってる半熟の目玉焼きを潰して混ぜていたのを思い出す。

「俺もホントは1回しか来た事ないんでよく分からないんですけど、確かこう」

そう言いながらざっくりとかき混ぜた。

美波さんはしばらくそのしぐさを見つめた後、俺を真似た。

この頃、貞二達はちよつとした騒ぎになっていたが、

俺は全く気付かずに美波さんとの食事を楽しんでいた。

食事も食べ終わり美波さんとの会話もいつのまにか緊張が取れた。

「つまり、今日は馨の事を聞きに来たってことっすか？」

「そーゆーこと。百合が馨くんの誕生日にプレゼントをあげたいんだけど、年も離れすぎてるし、趣味が全然分らないんだって。忍くんなら何か知ってるんじゃないかって」

「そーだったんすか。俺、美波さんにデート誘われて、完全に舞い上がってましたよ」

「またあ、心にもない事言わないの。でも私だってそのためにだけに忍くんを誘った訳じゃないんだけど…」

何か、おかしい空気になった。

その時、俺の携帯が鳴った。俺は照れを隠すように

「あ、噂をすればっすね。馨からメールっす」

俺は一言断ってメールを見た。

「デート中わりい。ちょっと緊急で。何か昨日から真央ちゃんが行方不明なんだって。友達全員当たったけど誰も居場所知らないらしい。忍何か知らないか？」

俺の顔色が変わった。それを敏感に感じ取った美波さんが、

「どうしたの？」

と聞いてきた。

「すみません、俺急用できたんで帰ります。埋め合わせは必ずします」

そういつて荷物をまとめた。突然の事に美波さんはとまどっている。会計を済ませ、美波さんを駅まで送った。

途中、聞きづらそうに

「何かあった？」

と言われたので

「友達が行方不明なんす。たぶん遊んでるだけだと思っんですけど一応探してみます」

と答えた。それ以外駅まで何も喋らなかった。美波さんもそれ以上聞いてこなかった。

駅に着き、もう一度美波さんに謝って別れた。

心の隙間にある思い

昨日の事が頭から離れない。

俺はのんきに何をしていたんだ。

俺は昨日からの真央の気持ちを全く考えていなかった。

どんな思いで俺に話したのか。俺はただ俺のことしか考えてなかった。

あいつが今どんな気持ちでいるのか、そう考えた時愕然とした。

俺はあいつの気持ちが分からない。

人を愛するという事がどんな気持ちなのか。

辛かった。俺には人を思いやる気持ちがこれっぽっちもないのではないか。

全ての人をただ何となく好きだった。

そして自ら歩み寄ることをめんどくさいと思っていた。

自分から受け入れてもらおうとする努力なんてしたことがなかった。

だから本気で受け入れてもらいたいと思い、

それが叶わなかった時の気持ちがどれだけの事なのか。

今の今まで考えなかった。

人を好きになつた経験がないことをこれほどやるせなく感じたのは生まれて初めてだった。

ふつふつと自分に対する怒りがこみ上げた。そして涙がでた。

渋谷の人並みが涙で滲んだ。

わかってやりたいのにわかってやれない。どうすればいいんだ。

今の自分にできることってなんだ。

早く真央を見つけて出してちゃんと話を聞くことからしかはじめられない。

そう思ったときには俺は譬に電話していた。

「おつかれ、今どんな状況？」

「おお、メールして悪かったな。今平気なん？って泣いてんのか？」

「…、大丈夫。…うん、もう別れた。そっちは？まだ連絡取れねーの？」

「まだだ。忍、あんま自分を追い込むな。お前だけのせいじゃねえ。しかも気になる情報もある。」

「いや、俺がバカだった。今の今まであいつの気持ちじゃ全然分かってなかった。」

そんなことを言った刹那、矢の様な言葉が俺の耳を貫いた。

「ふざけんな！自分を責めるのは後からでもできるだろ、いーから聞け！」

響のこんな声を初めて聞いた。俺は少し冷静になれた。

「真央ちゃんの両親も心配してる。ストーカーの事もあるし。しかもさっき聞いた話だと昨日の夜、ヤン車っぽいバンに無理やり乗せられてるのを見たって情報もある。」

ストーカーと聞いてはつとまった。

「いいか、泣いてる場合じゃねーぞ。場合によっては一刻を争うかもしれないんだ。しかもそんな時に限って、貞二は連絡つかねーし。忍はデートだし。俺もその情報が入る前はどっかで遊んでんじゃねって思ってた気合入れて探してなかったけど、さすがにヤバイと思う。こんな時頼れんのはお前しかいねーんだよ。しっかりしてくれ、マジで。」

まくし立てる響の言葉を聞きながら、俺の中で冷たいものが走り抜ける。

それと同時に今自分がすべきことが明確になってゆく。

「とりあえず俺に心当たりがある。20分時間をくれ。また電話する。」

冷静さを取り戻した俺の言葉を聞き、響は素直に電話を切った。その瞬間から俺の頭は猛スピードで回転しだした。

ナイトライダー

真央に付きまといていた奴は俺の地元の先輩だった。

俺は中学から私立だったために面識はなかったが、相当危ない奴だという噂は聞いた事があった。

常にナイフを持ち歩き、女をナンパしては車で拉致ってレイプしているということも耳にしたことがある。

俺は夕子を思い出した。あいつも真央と同じ中学だったし、バイト先も一緒だ。

何か知っているかもしれない。

前に俺の携帯を取り上げ勝手に赤外線で番号交換されたのを思い出して、電話帳を探した。

鹿取という苗字すら忘れていた俺は探すのに少々手間取った。

「もしもし、夕子？」

「もしもし」

「真央の事で聞きたいんだけど」

「よくわからない」

「あいつに付きまといた奴ってお前と同じ中学だよな？」

「よくわからない……」

何か様子がおかしい。すすり泣く声が聞こえる。

「どうした。落ち着けて。何か知ってるのか？」

「もうどうしたらいいかわかんないよお……」

いつの間にか号泣している。俺はゆっくりと語りかけた。

「わかった。もう大丈夫だ。俺に任せろ。何があっても守ってやつから、知ってる事話してくれ」

「…違うの。貞二くんが誰にもしやべるなって。でも…、貞二くん殺されちゃうかも……」

「いいか、このままだと最悪な状況だって考えられるんだ。俺を信じてくれ。何があった？」

夕子はポツリポツリと話し始めた。

昨日の夜、真央が無断でバイトを休んでいた事。

今日の夕方貞二から電話がかかってきて真央に付きまっていた奴の事を聞かれたこと。

そしてこの事を誰にも話すなと言われたこと。

今日の夜には何事もなく終わってるから安心しろと言われたこと。

「そうか。話してくれてありがとう。とりあえず誰か行かせる。今どこだ？」

家にいると言われた。

俺は髻に電話し、明日香ちゃんを夕子の家に行かせてくれと頼んだ。髻は明日香ちゃんを送り届けた後、バイクで俺を迎えに来た。

「何かわかったんか？」

「やっぱり真央に付きまどってた奴が拉致ったっぽい。今、貞二が一人で追ってるはず」

「マジか…。人数いないとやばいんじゃない？」

「いや、真央のこと考えるとこれ以上話を広げないほうがイイ」

「だな。っつーことは俺ら二人だけだよ…」

「あいつは一人で突っ走ってるけどな」

俺らの腹は決まった。

今頃貞二は必死で探してるに違いない。

「とりあえず、あいつらの溜まり場探すぞ」

そういつて俺はバイクの後ろに飛び乗った。

地元の公園やコンビニでそれっぽい奴らを見かけてはバイクで突っ込む。

そいつらがビビった拍子に、俺が跳び蹴りをかます。

いつもなら乱闘になるところだが、俺らの気迫に相手は完全に戦意喪失状態だ。

そして凄みを効かせて奴らの居所を聞く。

そんな事を3回繰り返した時、有力な情報が手に入った。

それは以外にも女の子からだった。

3 回目に入入したグループでも収穫がなく次に行こうとした時、そのグループにいた女の子が追ってきた。

その子も一度やられたことがあったらしい。

涙を浮かべながらその忌まわしい場所を教えてくれた。

その時馨が一度バイクを空ぶかせ、

「おめーの分のカタキもとってやるからなあ！」

といって、ウィリーしながら発進させた。

いきなりだったから俺は落ちそうになった。

「バカ！あぶねーし。カツコつけんよ。落ちてたらめちやめちやかつこ悪りーじゃねーか！」

「ははっ、まあ、そのほうが俺らっぽかったかもな」

「たしかに」

その時何故かすうっと緊張が解けた。

そう、俺らなんでもともとカツコイもんじゃない。

たぶんボッコボコにされるだろう。下手したら死ぬかもしれない。

けどいいじゃん。こいつと一緒になら。

どんなにかつこ悪い結果になったってこいつだけは分かってくれる。

ふいに言葉が出た。

「さあ、いこーか」

「おっ、仙道さんだ」

そうして俺らは死地に向かった。

月明かりの惨劇

俺らは街を爆走した。

いくつものテールランプをかき分けた。

途中から響は喋らなくなった。

俺が話しかけても「ああ。」としか言わない。

緊張感が高まっていくのを感じた。

そしてとある建設中のビルに着いた。

そこはもう何年も建設が中断しているらしく、工事用の資材や物が散乱している。

見覚えのあるバイクがあった。貞二のだ。

俺らはその隣にバイクを止めた。

エンジン音がやむとあたりは不気味なほど静かになった。

俺は転がっていた鉄パイプを手にした。

響は積み上げられたブロック塀を一つ掴んだ。

打ちっぱなしのコンクリートの建物に足を踏み入れる。

自動ドアが取り付けられる予定だったのか入り口がやけに広い。

俺は鉄パイプを引きずりながら進む。

キーンという音が辺りに響き渡る。

「なあ、ちよつと待てよ」

そう響に声をかけられ振り向いた。

その瞬間、響の持っていたブロック塀で殴られた。

いや、最初は殴られたことすら気付かなかった。

長年雨ざらしになっていたブロック塀が粉碎した。

その破片が視界の上からバラバラと降り注ぐのを見てようやく気付いた感じだ。

キーンという衝撃音が頭の中に鳴り響いた。

俺は訳が分からず、ぼーっと響を見つめた。

「忍は寝てろ」

そういつて俺を蹴っ飛ばした。

力の抜けていた俺は壁まで吹っ飛んだ。

手から鉄パイプが滑り落ち、「カンカーン」と音を響かせながら踊っているのが見えた。

馨はもうろうつとする俺に近づき、

「わりい。だけど、真央ちゃんも忍にだけは見られたくないだろう。それに貞二が一人で突っ走ったことを無駄にはできない。後で迎えに来るから安心して寝てろよ」

そう言々と鉄パイプを握りしめ奥へと歩いていった。

カッコつけてる場合じゃないだろうと言おうとしたが不覚にも気を失った。

「オラーツ!」「死ねや!」

激しい怒声で目が覚めた。

どんぐらい気を失っていたのか。

たぶんそんなに経っていないはずだった。

「ガコン!」「パリン!」

遠くで物がぶつかり合う音がする。

俺は飛び上がるように立ち上がった。

音のする方へ駆け出す。

馨に蹴られたみぞおちがめっちゃ痛い。

二階に上がり周りを見わたす。

誰もいない。その時上のほうから物音がした。

俺はさらに階段を駆け上がった。

そしてその時飛び込んできた光景は一生忘れないだろう。

男6人が輪になって罵声を浴びせながら何かを蹴り続けている。

馨だった。その下にはうつ伏せの貞二がいた。

しかも貞二の左足は外側にありえない角度で折れていた。完全に気を失っている。

馨は体重をかけないように少し浮かしきみにかばっていた。

男達はその隙間から馨の腹と顔を蹴り上げていた。

俺の中で何かがはじけた。

今まで感じたことのない感覚だった。

殺意や興奮といった感覚とも違った。

いや、感情そのものが消えていったのかもしれない。

何も考えていなかった。

俺は歩いて近づいた。

おもむろに一番手前の奴の髪を掴み、そのまま隣の奴に思いっきりぶつけた。

そこでそいつらは初めて俺の存在に気付いた。

そして髪を掴んだままそいつを背中から背負い投げした。

そいつは頭から地面に激突して気を失った。

仲間のチョーパンを食らった奴が後ろから襲い掛かろうとした。

俺は後ろ向きのまま蹴った。

そして反転しながらもう一方の足で勢いよく相手の顔面を蹴り飛ばした。

俺は体勢を崩し背中から着地したがすぐさま跳ね起き、

その勢いでもう一人に渾身の頭突きをかました。

一気に3人がぶちのめされた為か、残りの3人が窓際までさがった。

そこで俺は馨の方を見た。

馨は「フンッ！」と気合を入れて立ち上がった。

が、俺の足元で咳き込みながら仰向けに倒れた。

最初は暗くて分からなかったが貞二の下に真央がいた。

その上にボロ切れのような貞二が頭から血を流しながら覆いかぶさってる。

真央は仰向けで虚ろな目をし、貞二の頭をおさえて泣いていた。

真央の手とアゴの辺りにべっとりと血がついている。

馨が俺の身体を支えにして立ち上がった。

向こうの奴らも気を失ってる奴以外が立ち上がる。

2対5の睨み合いになった。

電気もない暗い建物の中で、誰かが持ち込んだランプの光が怪しく揺れる。

俺は奴らの足元を見た。

全員ひざが微かに震えている。

俺はさらに感情が冷え込んでいくのを感じた。

（こんな奴らに…）

そこでまた思考を止めた。

誰を見るでもなくその5人のかたまりにツカツカと近づいた。

一人が耐えかねたように突っ込んできた。

俺はしゃがみこみ相手のひざを避けながら脚払いをした。

前のめりに倒れこむ相手の顔に髯がトーキックを決める。

そいつは鼻を押さえながらもんどりうつて倒れた。

その時、相手の一人が逃げ出した。

残りの奴らも雪崩を起したように逃げ出し、階段を降りていく。

俺は追いかけて、階段の手すりを掴むと一番後ろの奴を両足で蹴った。

そいつは体勢を崩し、前の3人を巻き込みながら落ちていった。

しかし、すぐに立ち上がると全速で逃げていく。

俺も追いかけた。その時、髯が付いて来ない事に気がついた。

その間にも、奴らはどんどん逃げてゆく。

しかし髯達も心配だった。

俺は「んがぁー！ー！！」と叫び、悔しさを押し殺して3階に戻った。

真夜中のサイレン

俺が階段を上がっていると、おぼつかない足取りで降りてくる奴がいた。

髻に鼻を潰されたあいつだ。

俺に気付くとその場で座り込んで許してくださいと泣いていた。

俺はそいつの首を締め上げるように引きずりながら3階の部屋に戻った。

部屋に着くと俺はそいつを投げ飛ばした。

そしてあたりを見渡す。

俺に背負い投げされ、気を失っていた奴が頭を押さえながらハイハイで逃げようとしている。

俺はそいつの襟を掴み壁に押し当てた。

足でそいつの身体を押さえながらケツポケットから財布を抜き取り、免許証を確認する。

「真央を付けまわしてたのはお前か？」

すごい勢いで首を横に振って否定する。

結局首謀者は逃げた奴の一人だった。

名前は権藤春樹。高校を中退し、地元の暴力団に出入りしている。ヤクの売人のパシリのようなことをしているチンピラだった。

俺はもう一人の奴からも財布を出させ中を確認する。

学生証が出できた。

俺は「逃げたら殺すぞ！」といって部屋の隅に捕まえた二人を押し込めた。

改めて部屋を見渡す。

髻が壁にもたれながら胃液を吐いていた。

俺は暗澹とした気持ちで貞二の方へ近づき跪いた。

貞二は辛うじて息をしていた。

真央はひたすら泣きじゃくっている。

俺は優しく涙を拭おうとした。

その瞬間、真央は身体をビクツとさせ恐慌の表情した。

俺はその時氷のような表情をしていたんだと思う。

真央とこんな形で再会するなんて夢にも思っていなかった。
やるせなさが全身を覆う。

忘れていた「感情」という感覚が戻ってくるのを感じた。

俺はなるべく穏やかに言った。

「今、救急車呼ぶからな。貞二は大丈夫。気を失ってるだけだ」
真央がやつとの思いで頷く。

俺は携帯で119をダイヤルし場所とケガ人の数を伝えた。

電話を切り、貞二の頭を押さえていた血まみれの真央の手をそっと
はずした。

固まった血が張り付いてなかなか離れなかった。

そうして真央の手を握った。

何の言葉もかけられなかった。

二人を見つめたまま

「馨ー。へーきか？」

と聞くと

「おう、なんとか」

と返ってきた。俺は馨のほうへ顔だけ向けた。

「あーもー、俺かつこ悪すぎだよ…」

と馨は天を仰いだ。

「そんなことないって。俺だつて最初の不意打ちができなかったら
ヤバかったかもしれない」

「そーなんだよ。俺だつて不意打ちできりゃもうちょっとやれたの
になあ。何せ、俺が突入した時は全員身構えてて、しかも貞二達を
盾にしてたから何もできなかったし」

「まあ、そんな日もあるよ」

「ってゆーかさ、お前のせいだよ。鉄パイプ引きずってあんな音だ
してたら誰だつて気付くし！」

「ごめん、なんか盛り上がったって」

「ばっか、盛り上がっちゃってじゃねーよ。あのまま2人で行ったら最悪だったぞ。もっと頭使ってくれよお」

「わりい…」

そんな話をしていると遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

その時、ガタガタと震え小さくなっていた奴らが逃げ出した。

馨は「おい、待て！」と言って追おうとしたが、

俺は「ほっとけよ」と言っただけで追わなかった。

しばらくしてサイレンの大音響がすぐ近くで止んだ。

俺と馨が外まで出て救急隊員を誘導した。

救急隊員が現場を見た瞬間、事件性を確信したらしく警察を呼んだ。貞二と真央は先に搬送され、俺らはパトカーが来るまで待たされた。パトカーと追加の救急車が到着すると、あたりは赤色灯の渦になった。

とりあえず俺らも救急車に乗りパトカーを引き連れ病院に運ばれた。

缶コーヒーとオヤジ

病院に着くと簡単な手当てをしてもらい開放された。

処置室を出ると刑事が待ち構えていた。

「久しぶりだな、半村」

「あれ？何でオヤジさんがいるんすか？」

俺は不思議だった。てっきり少年課の刑事が来ると思っていた。

「まあ、ちよつとな。それより最近智也とは遊んでないのか？」

「たまにつすね。オヤジさんこそ家で話さないんすか？」

「うむ。まあそんなことより……」

話をはぐらかされてしまった。

実はこのオヤジさんは米倉さんのお父さんだ。そして刑事をしている。しかもマル暴。

中学時代からオヤジさんとは面識があった。まあホントはそんなレベルじゃない。

米倉さんとバカやって警察に捕まると、俺らは少年課ではなくマルボウに連れてかれた。

暴力団対策のこの課の人達はどっちが本職か見分けがつかないほどイカつい。

そして延々とこのオヤジさんに説教を食らった後、魔の教育的指導が待っている。

警察道場でケツが痛くなるほど投げられるのだ。

おかげで、柔道を習ったこともないのに完璧な受身と少々の投げ技が身についてしまった。

しかし米倉さんとするむ機会も減り、最近はそこまでヤンチャな事をしてなかった為、この日久しぶりに会った。

俺は、今回のことについて聞こうとするオヤジさんに

「とりあえず、のど渴いたんすけど……」

と言うと、渋々ロビーの自販機の前まで移動しコーヒーを買ってく

れた。

ひんやりとしたイスに並んで腰掛けた。

救命救急の所とは違い、ひっそりとしている。

薄暗いロビーに「カコツ」という缶を開ける音が寂しく響く。

それを合図に話し始めた。

「どうゆう事になってる？」

「よくわからないっすよ……」

「分からないじゃないだろう。久しぶりに道場行くか？」

「勘弁して下さいよ。ホントに知らないんすよ」

「じゃあ、何であそこにいた？お前が犯人の一味って訳じゃないだろう」

「貞二も真央もダチっす。ピンチだって聞いて助けに行ったんすけど、すでに犯人達はいなくて……」

「じゃあ、何でお前や井出が怪我してんだよ」

「それは……」

俺は言葉に詰まった。ごまかすように缶コーヒーを一気に飲み干す。すかさずオヤジさんの語気が強まる。

「いいか、もうこれはガキのケンカのレベルじゃないんだ。婦女暴行と殺人未遂だぞ。立派な刑事事件なんだ。あとは警察の仕事だ。知っている事を全部話せ！」

警察の仕事？その言葉に俺もケンカ腰になった。

「ふざけんな！真央がストーカーされている時に警察は何かしたんかよ！事が起こってからしか動き出さない奴らに何を任せろってゆーんだよ！ああ！」

俺はオヤジさんの胸ぐらを掴んだ。

が、その腕をものすごい力で引き離された。

その拍子にそばにおいてあった空き缶がイスから落ちて音を立てたが、オヤジさんの怒声でかき消された。

「じゃあ、ガキのお前に何ができるんだ！言ってみろ！」

ド迫力の声が廊下の向こうまで響き渡る。

救急受付から何事かと顔を出す看護師。

しかし異様な雰囲気にもたすぐに引っ込んだ。

俺は言葉が出なかった。確かにそうだ。

実際、真央の事も守ってやれなかった。しかもチャラチャラと他の女と会っていた。

貞二や馨の男気も無駄にした。

権藤も取り逃がした。

だからってもうこれ以上人任せにするのだけはできなかった。

いつの間にか、言葉にならない怒りと不甲斐なさでブルブルと震えていた。

そんな俺の気持ちを察してかオヤジさんの語気が若干穏やかになった。

「お前の気持ちもわかる。が、そうゆうわけにもいかないんだ。木庭貞二がちよつとな…」

「まさか…」

急に不安になった。

かなりやられてはいたが、頭の傷もそんなに深くはないように見えた。

ただ場所が場所なだけに最悪の事態が頭をよぎる。

俺の不安そうな表情を見てオヤジさんは違う違うと手を振った。

と同時に掴みっぱなしだったもう一方の俺の腕を放した。

「命に別状はない。たぶんもうすぐ意識も回復するだろう。まあ、折れた足は時間がかかりそうだがな。問題はあいつの家の事だ」

俺は家と聞いて今度は怪訝な顔をした。

「お前知らなかったのか？あいつは指定暴力団木庭組組長、木庭誠一郎のお孫さんだぞ。父親は木庭興業社長、木庭一彦。要はヤクザのサラブレッドだよ」

全然知らなかった。

そして同時に貞二の中学時代の事件も納得してしまった。

単に従業員が迎えに来ただけだったんだ。

そういえば、貞二は全く家の事を話さない。

しかも俺らとは地元が違いため噂も流れてこなかった。

さらに俺らに対してそうゆう雰囲気を出す事もなかった。

俺自身があまり家の事を話したくないので、これまで貞二の家のことなんて聞こうとも思わなかった。

「だからオヤジさんがこんな所まで」

「そういうことだ」

いまいましげに言い放った。

「けど何も知らずに友達でいるなんてお前らしいな。智也には伝えてあったんだがな。絶対あいつとは付き合うなと。組長の孫と刑事の息子が一緒につるんでるなんてシャレにならないからな」

確かに。もし米倉さんと貞二が一緒にとっ捕まったらそれこそオヤジさんの立場がない。

それじゃなくてもしょっちゅう補導される米倉さんのせいでオヤジさんのにも署内で少なからず影響はあったはずだ。

たぶん米倉さんもあえて貞二と関わらないようにしていたんだと思った。

もしかしたら、周りの先輩達にも貞二の事を嗅ぎ回るなど言っていたのかもしれない。

「まあ、お前は昔からそんな奴だったな。智也の周りにいる奴らは少し違ってたからな。道場で泣かなかったのもお前ぐらいだよ」

俺はこのオヤジさんが結構好きだ。俺の父親よりよっぽど男らしいし優しい。

ガキの俺らの事もそれなりに考えてくれるような包容力と余裕がある。まあ若干口うるさいトコもあるけど。

「そんなお前だから、例え犯人を知ってても口を割らないかもな。だから心配でもあるんだ。これからはヤクザも出てくる。もうお前の範疇は超えてるんだ。もしかしたら木庭組に呼び出されるかもしれないぞ。あいつらは口を割らそうとしたら何だってやる連中だからな。まあ学友ということまでそこまでひどくはされないだろうが、

気をつけるよ」

途中から俺を脅して吐かせようとしてるのが見え見えだ。

「これは警察の威信もかかっている。ヤクザと警察、どっちが先に犯人を見つけるか。先にあいづらにとっ捕まったら行方不明者が一人増えるだけだ。そして事件は迷宮入り。その前になんとしてでも捕まえて法の裁きを受けさせなければいけないんだ」

「そんなこと言われても、知らないもんは知らないっす……」

オヤジさんはもの凄い形相で俺を睨みつける。

さすがにちよっとビビったがここで引くわけにはいかなかった。

結局何も喋らない俺に見切りをつけたのか、気をつけて行動しろと釘を刺されて帰された。

帰り際、貞二の病室をのぞこうとした。

しかし、「面会謝絶」と書かれた札の前に強面の男達が何人か突っ立っていた。

俺は諦めて病院の外に出ると、顔に包帯を巻きつけた髻が待っていた。

不安な一夜

初夏の風がゆつくりと吹いている。
時刻はちょうど0時を指していた。

病院の前のスロープにもたれかかりながら馨が携帯をいじっていた。
「だいぶ男前になったんじゃない？」

俺の声に気付いた馨が顔を上げる。

「チッ。あの看護婦のババア。大げさすぎんだよ」
頭の包帯を押さえながら不満そうな顔をする。

「なあ、痛み止めの薬少し分けてくれよ」

俺はさつきから頭のとっぺんがジンジンしている。
今頃になってブロック塀でやられたところが痛み出していた。

しかし馨は俺を上から下までじっくり見たあと

「どっかケガしたんか？」

と言い放った。

「おいしい！自分でやった事忘れてんのかよ」

そういつて俺は頭のとっぺんを指差した。

「おお、そうか」

馨はがさがさと袋を開けオレンジ色の錠剤をいくつか取り出した。
俺に手渡ししながら

「脆くなつてたとはいえ、あんなに粉々になるとは思わなかったよ。
お前すげー石頭だなあ」

と悪びれる様子もなく言った。

「めっちゃめっちゃ痛かったっつーの！意識ぶっ飛んだもんよ。今度覚えとけよ」

「わりい。でもまあ、あれだ。朝のお返しだよ」

「朝…？朝って寝起きの関節技のことか？んなもん全然釣り合い取れてねーし」

「そうか？ちよつとだけだろ」

そう言つて携帯をいじり続けている。

ホントこいつとはやつてられん。

俺はそんなストレスを紛らわそうとタバコを探した。

ズボンのポケットに入っていたタバコがぐちゃぐちゃになっているのがわかった。

そして衝撃の事実も発覚。

「あーーーーー!」

俺の叫びに馨も顔を上げた。

「どうした?」

「まじシヨック。このパンツ買ったばつかなのに…」

俺は今日の美波さんとのデートのために最近買った白のブーツカットジーンズをはいていた。

それが一連の乱闘の埃と土煙のせいで見事に茶色くなっている。

「んなことより貞二大丈夫かな? 面会謝絶だろ?」

俺は泣きそうな顔でズボンをはたく虚しい努力を続けながら

「さっきマル暴のオヤジさんに会って話し聞いたら大丈夫そうな事言つてたぞ」

と答えた。

「ああ、オヤジさんも来てたんだ。ま、当然か」

「何だ、知つてたのかよ。貞二の家のこと」

「だいぶ前に貞二から聞いたんだ。だけど忍には話さないでくれって」

「何だよそれ…」

「知らねーよ。本人に聞けよ」

それ以上馨は話そうとはしなかった。

その時、一台のタクシーが病院の前に止まった。

中から凄い勢いで人が駆け出してきた。

真央の両親だった。

父親を見るのは初めてだったが、母親はよく近所で犬の散歩をしているため多少の面識があった。

俺らは軽く会釈をした。

するとそのまま通り過ぎた父親が血相を変えて戻ってきた。

そして狼狽しながら叫んだ。

「お前ら…、お前らのせいであ…娘が…、真央がどうゆうことになつてゐるかわかつてんのかあ！」

いきなり怒鳴られて困惑した。

後ろから追いかけてきた母親が弁明してくれた。

「ちよつとお父さん！この子達は前からずっと真央を助けてくれてた子達なの！ごめんね半村くん。この人ちよつと動転してて…」
そついつて母親は何度も頭を下げた。

父親は納得いかないという顔を浮かべていたが、母親に押し出されるように病室へと向かつていった。

「まあ、気持ちちは分かるよな…」

馨がポツリと行つた。

俺も同じ気持ちだった。

もちろん親になつた経験なんて無いから全ては分からないだろうけど、

もし妹が…とリアルに想像しかけたが脳が拒絶していた。

今もあえて真央のことを考えないようにしている自分がいる。

馨もきつと同じ気持ちだったんだと思う。

さつきまで馬鹿な会話でごまかしていたのにそれができなくなった。

お互い無言になり、タバコを吸う本数が加速していく。

しばらくして夕子と明日香ちゃんが病院に駆けつけた。

「真央は？」

到着するなり聞いてきた。

俺らが何も答えられないでいると二人とも涙ぐんだ。

「貞二くん…は？」

明日香ちゃんが恐る恐る聞いてきた。

「かなり…、重傷。」

意識が無いとは言えなかった。

突然夕子が「わあ」と泣き崩れた。

「私が…、私が早くみんなに知らせなかったから…」

何て言ってあげればいいかすぐには言葉が出てこない。

夕子の泣きする声が夜の闇に響く。

「大丈夫。貞二は殺しても死なない奴だから。明日にはケロっとしてるよ」

そう馨が笑って声をかける。

その時病院から看護師が一人出てきた。

確か俺の隣の処置室で馨に包帯を巻いていた人だ。

「あなた達、もう遅いんだから家に帰りなさい。親御さんが心配するでしょう」

四十過ぎのいかにもベテラン看護婦といった感じのその人が、腕を組み毅然とした態度で言ってきた。

すかさず馨が口を開く。

「ああ、お姉さん。さっきはありがとうございました。僕ら全員、友達が倒れたから今日は病院にいるって親には連絡してあります」

こいつさっきババアって言ってなかったか？しかし今回はかりは馨の口のうまさに助けられた。

その看護婦は組んでいた腕を腰にやり、しょうがないわねという表情をし

「そんなところで泣かれちゃ近所迷惑よ。さっさと中に入りなさい」
そう言って俺らを中へうながしてくれた。

あまり中まで入るのは気が引けたので入り口付近の長イスに並んで腰掛けた。

さっきの看護婦さんが近づいてきた。

「いい？おとなしくしてなさいよ。それとここはホテルじゃないんだから眠っちゃだめよ。寝るんだったら家に帰って寝るように。それから君！」

馨を指差す。キョトンとする馨。

「君はなるべくなら帰りなさい。ちゃんと休まないと高熱でるわよ。」

ってゆうかも熱あるんじゃないの？」

そう言つて馨の顔に手の甲を押し当てる。

「やっぱり。…ちよつと待ってなさい。」

少しして氷袋を持つてきてくれた。

その時大音響のサイレンが病院の前で止んだ。

新しい急患が運ばれてきたらしい。

突然周囲が慌ただしくなる。

その看護婦もパタパタと靴を鳴らしながら去っていった。

その頃には夕子も少し落ち着いてきた。

明日香ちゃんが夕子の肩を抱きながら

「看護師さんつてかつこいいね。怖いもの知らずの馨くんがタジタジだもんね」

「うん。何かあの服着て強気に出られると言う事聞かなきゃいけない感じになるよな。今度ドンキでナース服買ってくるから明日香ちゃん着てみてよ」

「そしたら言う事聞いちゃう？」

「聞いちゃう聞いちゃう」

泣いてた夕子がクスリと笑った。

「ちやつかり聞いてんのかよ」

馨のつつこみでみんな笑った。

夜明けが近づいていた。

夕子は泣き疲れて明日香ちゃんの肩にもたれたまま眠っている。

明日香ちゃんも夕子の頭の上に顔を乗せてそのまま眠っているようだ。

馨は顔を冷やししながら無言で痛みに堪えていた。相当熱が高そうだ。顔が真っ赤になっている。

さすがに俺も昨日からの疲れでへとへとだった。たまに意識が飛ぶ。「木庭くん、意識回復したわよ」

さっきの看護婦さんが二人を起さないように小さい声で教えてくれ

た。

寝ちゃだめって言ってたけどホントはとってもイイ人だ。

「真央はどんな状態ですか？」

「中村真央さんね…。処置は無事終わったけどその後ちよつと取り乱しちゃって。今は鎮静剤の注射打ったからまだ眠ってる」

本当は他人に話しちゃいけないことなんだろうけど、一晩中待っていた事と一緒に運ばれてきた事も考慮してくれたんだと思う。こっそり教えてくれた。

そしてこれ以上待つても今日は面会できないと言われた。

貞二も命に別状は無いみたいだし、いったん解散する事にした。

帰り際、貞二と真央の事をみんなにどう説明するか話し合った。

真央に関しては結局友達と遊んでて無事だったということにした。

貞二に関しては真央を探してる途中にあせってバイクで転倒し、入院してることにした。

真央が入院してる事は言わないでおこうということになった。

みんなには聞かれたら答える程度にとどめようということにもなった。

それぞれが色々な思いを胸に秘め、家路に着いた。

俺はやつとの思いで家にたどり着いた。

そのままベッドに倒れこんだ。

長い一日だった。ってゆーかここんどこまともにベッドで寝ていない。

もう色々ありすぎて頭の中がぐっちゃぐちゃだ。

もう限界…って思った瞬間眠りに落ちていた。

優しくない俺

エレベーターのドアが開く。

中には誰もいない。

俺は乗り込み屋上を目指す。

途中、ドアが開き見知った顔がどんどん乗り込んでくる。

俺はその度に笑顔を交わし話に興じる。

乗り込んでくる人たちと会話する事ばかりですでにいる人のことなんか忘れてる。

もう誰が途中で降りて乗ってきたかなんて全く分からない。

そのエレベーターに乗り続けるには新しい人との会話についていくしかない。

そのうち一番最初に話してた人とその会話が思い出せなくなった。

最上階が近づく。

気付くと俺ともう一人だけになっている。

その人も寂しい笑顔と共に最上階で降りてしまった。

新しく乗り込む人はもういない。

ゆっくりとドアが閉まる。

人がいなくなったエレベーターではじめて呼吸をした。

屋上に着いた。

一人っきりの屋上にはただ泣き出しそうな薄暗い雲が流れていた。

目を覚ました。体中がだるい。

時計を見た。昼の11時を指している。

マルボロに火を付け大きく吸い込む。

ぼーとした頭でさっきの夢を思い出す。

はつきりとは思いつけられない。悲しい夢だった気がした。

昨日の事を考えた。

あの事件現場で俺の感情が失われていく感覚があった。

馨や貞二や真央。一瞬誰も見えなくなった。

相手の6人すらも。

そこには自分しか居なかった気がする。

ただ自分の気持ちを解放させただけのように感じる。

よく、優しいねって言われる度に違和感を感じた。

俺は「しょーがねーな」というのが口癖だ。

誰かの為に喜んでやってるように思われるのがイヤなんだ。

負担に思われなくなかった。

ホントは自分のためなんだ。

たまたま相手が喜んでくれる時はラッキーなだけ。

ホントは怖いんだ。

自分がこんだけやってるのについて思っても相手に余計なお世話と思われるのが。

だから自分のためって思ってるだけ。

今回も、俺が真央を助けに行ってよかったのだろうか。

俺が病院で一晩中待っていてよかったのだろうか。

ただ自分がそうしたかっただけなんじゃないか。

自分の卑しい部分に気持ち悪くなった。

吸うのも苦しくなりタバコを消した。

今回、真央に起ったことは俺と親密になる前のことが原因だった。

これからはどうなんだ。

俺の行動のせいで他の誰かが傷つくことはないのか。

昨日も権藤の居場所を探るためにまた新たに敵を作った。

そいつらの報復が俺に向けられるとは限らない。

ただあの時はそんな事考えてなかった。

ただ自分の気持ちを優先した。

結局俺は誰よりも自己犠牲という言葉から遠い存在に思えた。

俺はむしろしゃした気持ちを払拭しようと思立て伏せを始めた。

だんだん辛くなる。だけど止められなかった。

もうためだと思つと自己嫌悪に襲われる。

自分の力だけで全てを守れるとは思えない。

けど少しでも力が欲しいと感じた。

もう自分の気持ちとか誰かの気持ちとか関係なかった。

自分がどう思い、どう思われたいのかも。

そして何が正しくて何が間違ってるのかさえも。

自分を含めて俺の大事なものを守りたいとただそれだけを願った。

自分の鼓動と呼吸音しか感じられなくなるまでひたすら腕立てを続けた。

そして携帯が鳴った。

木漏れ日の中の病室

馨からだった。

俺は流れる汗を拭きながら電話に出た。

そして貞二が木庭組の息のかかった病院に転院していることを聞いた。

まだ全ての精密検査が終わっておらず、あまり動かしてはいけない状態だったが半ば強引に転院したらしい。

俺はその病院に行こうと誘ったが、馨は置きっ放しのバイクを取りに行ってから向かうと言った。

仕方なく俺は一人で行く事にした。

シャワーを浴び家を出た。

7月の空はとてもきれいな青だった。

遠くから入道雲がホイップクリームのように縦に広がっている。

貞二の地元の駅に降り立ち病院を目指した。

途中、コンビニに立ち寄り、バイク雑誌などを買っていく。

病院の前に着いた。結構でかい。

最後に会った時、微妙な感じで別れたつきりだったから何となく会いにくい。

俺は喫煙スペースに移動し一服してから病室へと向かった。

ナースステーションで貞二の病室を訪ねた。

病室の前には強面の人が2人立っていたが、「学校の友達です」というとすんなり通してくれた。

個室のドアを開ける。

貞二は眠っていた。

左足をギプスで固め天井から吊っていた。

右手も三角巾で吊っている。頭は包帯と網をしていた。

ベッドを少しだけ起こしマンガが読みかけの状態でおなかの上に置いてある。

そつとそのマンガをどけてやると、貞二が目を覚ました。
「よお」

俺が声をかけると貞二はバツが悪そうに窓のほうを見た。
窓際に置かれた花瓶にはきれいな花が飾られていた。
水面には太陽の光がキラキラと輝いている。

俺は近くのイスに腰掛けた。
なんとも言えない空気が流れる。

「おまえさ……」

外を眺めたままふいに貞二が話した。

「ちゃんとナースステーション通ってきたんか？」

「ああ一応。面会の紙書いて、変なバツチ渡された」

「めっちゃ巨乳のねーちゃんいなかった？」

そついうと貞二は笑ってこつちを見た。

「いたいた。すげーな。あれ絶対、前世牛だよな」

「ははっ、牛って。そりや言いすぎだろ」

二人して笑った。

おれはコンビニで買ったバイク雑誌を取り出す。

すると貞二は目を輝かせて「ありがとう」と言った。

「いや、これは俺の。貞二のはコレ」

2冊目の雑誌を取り出した。

その雑誌は表紙に看護婦が写ったエッチな雑誌だった。

俺はその雑誌をテレビの前に飾った。

「おおい、勘弁してくれ。俺動けねーんだよ」

「ばっか、俺だって買うのめっちゃ恥ずかったし。しかも店員おねーさんなんだもん」

「じゃあ、買うなよ」

「しょうがねーじゃん。でもちゃんとその店員に、温めてください、人肌で。って言っといたかな」

「こいつアホだ。しょーがねーな、受け取ってやるよ。んで温めてもらったん？」

「さすがに無理だったわ。だから代わりに俺が温めといた」

そう言っただけはあの雑誌を手渡した。

「それじゃ意味ねーし！」

そっぴいながらパラパラとページをめくった。

「ところでさ……」

俺がそっぴいと貞二は顔を上げた。

「いきなり病院移ったからびっくりした。しかもお前の家って……」

貞二は浮かない顔になった。

「ああ、ヤクザだよ。表向きは木庭興業なんて名乗ってるけどな」

「全然知らなかったし。でもまあ俺の親父の職業だってみんなに言っただけ無いくせだ」

ぼかーんとした貞二の顔があった。

「フツ、結局……お前にとっちゃその程度なんだよなあ。なんで俺バレたくないって思ってたんだろ」

「態度が急変する奴もいるからだろ。でも親は選べないからなあ。うちだって最悪だよ」

「……やっぱお前は変わってるよ。……ありがとな」

「なんだよいきなり。気持ち悪りーな」

そのあとは貞二の容態について色々聞いた。

左足複雑骨折に半月盤損傷。右腕と小指も骨折していた。全治3ヶ月。

頭の傷は深くは無く、切れていただけですぐ治るそうだ。

「真央ちゃんの容態はどうなんだ？」

貞二はずっと聞くタイミングを伺ってたんだと思う。緊張した表情をしている。

「昨日ずっと病院で待ってたけど、結局会えなかった」

「そうか……。やっぱ最初に忍に知らせるべきだったのかなあ」

「んなもんわかんねーよ。ただ俺が現場見たとき、お前死んでると思っただけ」

そういつて貞二が気を失っている間の出来事を説明した。
すると貞二も話し始めた。

「俺は昨日の昼に瞳ちゃんから連絡あつて、ちょっと引つかかつてたんだ。前々から権藤の事はマークしていた。だけど最近は真央ちゃん俺らとよくいることもあつて姿を見せてなかった。でも一昨日あんな事もあつて油断していた。連れ去られたつて聞いた時はまさかと思つたよ。俺が駆けつけた時にはもう遅か…つた…」

貞二が泣いた。一番見たくない光景だつたに違いない。

俺は窓のほうに移動して、景色を眺めていた。
しばらくして貞二は、

「あいつら許せねーよ…。でも俺もこんななつちまつた。もうどうする事もできねー…」
悔しそうに呟く。

「どうするか、いや、どうなるかなんてまだ諦めんじゃねーよ。」
俺は外を見たまま静かにそう言つた。貞二があせつた顔をする。

「ばっか、もうこれ以上無理だよ。木庭組まで敵に回す気か？権藤は暴力団にも出入りしてたからな。うちの組の面子もかかってるんだ。邪魔する奴は容赦しないんだ。それに警察だつてヤクザに先を越されるわけにはいかなから本格的に捜査し始めてるだらうし…」

「うるせー！ヤクザや警察の面子の為に引けるかよ！あいつら真央の気持ちや貞二の悔しさなんてこれっぽっちも頭にないだろ。そんな奴らに任せられるかよ！」

俺は何故か耐え切れなくなり、部屋を出て行こうとした。

「待てつて。気持ちはありがたいけど…、忍はヤクザの本当の怖さを知らないんだ」

俺は振り向き、

「俺は真央やお前に後ろめたい気持ちを持つて顔を会わせる事のほうがよく怖えよ…」
そう呟いた。

貞二は俺を見つめたまま黙つた。沈黙が走る。

すでに日が傾き西日が室内を赤く染めていた。

貞二の顔は影になりその表情が掴めない。

「…わかったよ。忍に任す。やりたいようにやってくれ。俺の気持ちはお前に預けるよ」

俺は「ああ…」とだけ言った。心の中で、お前らの気持ち全力で守ってやると誓った。

眩しい関係

「ガチャ」

病室のドアが開いた。

「よお」

馨だった。

「なんだ、元気そうじゃん。どしたの？怖い顔して」
さっきまでの緊張感を知らない馨はそう言いながらヤンマガを置いた。

馨の革ジャンの胸にはしつかり「面会者」と書かれたバッチをつけている。

「お前よくそんなのつけられんな」

「あれ？何だよつけてねーの？」

馨はいそいそとバッチを外しながら

「ってゆーか、めっちゃ巨乳のナースがいたんだけど、見た？」

つくづく俺らの思考回路って低レベルだと思う。

でもそんな馨になんか救われた。

「ふっ、俺らが真面目な話してる時に、空気ぶち壊しだよ」

貞二が鼻で笑いながらそう言ったが、馨はすぐに言い返した。

「そんなもん読みながらマジな話って、どんな状況だよ」

馨が貞二の手元を指差す。

そこには俺がプレゼントしたエッチな雑誌の、それはそれは卑猥な写真が写っていた。

俺も乗っかる。

「いや、貞二にとっちゃ深刻な問題だよ。何せ右手が使えねーからな」

馨が納得したような顔をして

「確かにそーだな。だけど左手でも他人のような感覚で結構新鮮らしいぞ」

貞二は、こいつらバカだという顔をしたが、

「いや、ぶっちゃけお前ら早く帰らねーかなって思ってる。早く試してーんだけど…」

と、結局貞二も乗っかってきた。

それから俺らはいつものように馬鹿な話を続けた。

何故かすげー幸せに感じた。

しばらくして髻が

「じゃ、俺帰るわ」

と言い出したので俺らは揃って帰ることにした。

帰り際、貞二が俺に何かを投げてきた。

慌ててキャッチした。バイクの鍵だった。

「礼だ。お前にやるよ」

ものすごく真面目な顔をした貞二がいた。

貞二がこのバイクをどんなに大切にしているか俺は知っている。

なぜなら、いつも部品の細部に至るまでピッカピカに磨き上げられているからだ。

「礼ってなんだよ。別に何もしてねーし」

そう言っても貞二は黙っている。

「…しょーがねえ。お前が治るまで借りといてやるよ」

「いや、貸すんじゃない。お前にやるんだ」

俺は少し考えた後、

「あんなヘッポコバイクいらねーよ。借りるだけだ。それより…」

ヘッポコと聞いて貞二はちよつと怒ったような顔をしたが俺は構わず続けた。

「今度何かおこれよ」

貞二も気付いたみたいだった。

ふつと表情を和らげ天井を見た。そして

「…ああ、今度な」

そういつて天井を見続けていた。

俺は早く治せよと言って病室を出た。

歩きながらバイクの鍵を見つめ、思った。

俺らに恩や貸しなんて存在しない。

それぞれがやりたいようにするだけだ。

誰かにこう思われたいからじゃなく、俺がこう思うからやる。それでも分かってくれる奴がいる、それだけでいいんだ。

病院を出ると馨が待っていた。

「早く乗れよ。貞二のバイク取りに行くんだろ」

でっかい夕日が馨の後ろに沈んでいく。

なんか涙が出そうになった。

「ああ、そうだな」

俺は眩しそうなふりをしながらバイクの後ろに乗り込んだ。

金崎聖矢登場

俺らは昨日の現場に向かった。

あたりはすっかり暗くなっていた。

ライトに貞二のバイクが照らされた。

俺らは昨日と同じようにバイクを横付けする。

建物には「立入禁止」と書かれた黄色いテープが張られていた。バリバリと剥がしながら中へ入っていく。

3階に着いた。

昨日の光景がフラッシュバックする。

俺は無言で貞二達が倒れていた場所に手を付いた。

あいつらがどんな絶望的な心境でここにいたか。

そう思うと胸が痛かった。

馨が置きっぱなしになっていたランプに火を入れた。

そのあたりがだけがボウッと明るくなる。

馨がランプを置こうとした時気になるものが目に入った。

俺はランプの底を見た。

「9 LOVE 6（クラブシックス）」

そう書かれたステッカーが貼ってあった。

俺はそのステッカーを剥ぎ取りポケットにねじ込んだ。

「パリン！」

いつの間にか馨が窓際まで移動しガラスを殴った。

そして壁のほうを向いたまま座り込んだ。

「うつ、うつ……」

声を殺して泣いていた。

みんなやるせなさでいっぱいだった。

ガキの俺らにできる事なんて何にも無かった。

俺はランプの火を消し、馨の隣に壁を背にして座った。マルボロに火を付ける。

何も言わず黙って吸い続けた。

暗闇に馨のすすり泣く声だけが響いていた。

二本目に火を付けたとき馨が向き直った。

勢いよく壁に背中を押し付けて座り直し、大きく深呼吸した。

俺は付けたばかりのマルボロを手渡した。

馨は無言で受け取り吸い始めた。

もう泣いてはいないようだった。

俺は暗闇を見つめたまま、

「貞二の家に行ってくる」

そう言った。馨が俺を見るのを感じた。

「それはさすがにまずいんじゃないか？」

「だから一人で行ってくる」

「そーゆーのやめろよ。…俺も行く」

「いや、一人で行かせてくれ。馨は真央の様子を見てきてくれないか？」

俺は馨のほうを見た。俺の眼差しに馨の表情が変わる。

「…わかったよ。そんな顔すんなよ。忍にそんな顔されると何も言えないじゃん」

「悪いな。…頼む」

俺らは現場を後にした。

馨は真央の病院へ向かった。

俺は貞二のバイクにまたがりアクセルをふかした。

何故か貞二と共にいる気がした。

俺はまた貞二の地元の町に戻ってきた。

しかし貞二の家といっても場所が分からない。

直接貞二に聞く訳にもいかず、どうしようか迷った。

タバコが切れていたのとおりあえずコンビニに向かった。

コンビニにバイクを止めて入ろうとした時、駐車場にたむろっている3人組と目が合った。

一人はつなぎの袖を腰に巻きＴシャツ姿の大男でもう二人は族っぽい服を着ていた。

服の腕の所に「流聖会」という刺繍がしてあった。

俺は気にせずコンビニに入っていた。

コーヒーを持ってレジに行き、店員にタバコの番号を伝える。

私服だとタバコが買いやすい。

店を出ると

「オイ！」

と声をかけられた。

さっき目が合った３人組だ。

俺はそのままバイクに乗った。

「シカトか？コラ？」

族っぽい一人がポケットに手をつ込んだまま近づいてきた。

「めんどくせーなあ……」

そうつぶやいて俺はバイクを降りようとした。

跨いでいた足を降ろす振りをしてそのまま水平にそいつの頭を蹴り倒した。

俺の回し蹴りをこめかみに受けたそいつは、足元にあった縁石にまずきそのままコンビニのゴミ箱に突っ込んだ。

続いて突っ込んだできたもう一人も払い腰で投げ捨てた。

その時、俺の裏ももに衝撃が走った。

大男のローキックが俺の裏ももにめり込んだ。

まるで金属バットでぶったたたかれたような衝撃だった。

一瞬動きが止まった俺の顔の前にドでかい手のひらが迫ってきた。

「バチコーン」

耳の奥まで鳴り響く音と共に俺は後ろに吹っ飛んだ。

そのまま一回転して立ち上がる。

しかし膝が笑っていうことを聞かない。

そのまま前のめりに膝をついた。

何が起こったか一瞬わからなかった。

顔の痛みで張り手を食らったのは分かった。

しかし張り手というよりは、まるで岩で殴られたみたいだった。やっとの思いで立ち上がり睨みつける。

その大男はタバコに火を付け一服していた。

「おっ、意外と根性あるじゃねーか」

タバコをくわえたまま近づき俺の胸ぐらをおもいつきり掴んで凄んだ。

それは予想外の言葉だった。

「なんでテメーが貞二くんのバイク乗ってんだよ、コラ！」

言葉を理解するのに一瞬かかったが、反射的に

「ダチだからだよ。テメーこそ誰だ、コラ！」

と返した。

その大男のタバコの先が俺の目に当たりそうだったが構わず睨み続けた。

しばらく睨み合いが続く。ふいに大男が

「オイ、押さえてろ！」

と残りの二人に指示した。

そのわずかな隙に俺は袖を掴み投げようとした。

が、その時には俺の腹に大男の膝がめり込んでいた。

鈍い衝撃がはらわたを締め付ける。

息ができない。

すかさず脇の二人が俺を取り押さえた。

大男は俺から手を離し、ポケットから携帯を取り出す。

そして誰かに電話しだした。

少しの間の後、相手が出た。

「あつ、貞二君？ 久しぶりっす。流聖会の聖矢です。何か貞二君のバイク乗り回してる奴捕まえたんすけど…、え？ 名前？」

携帯から耳を離し名前を聞かれた。

俺はぶっくらばうに「半村…」と言った。

「何か半村って言ってます。え？ あつ、はい。いやそんなことない

つすよ。うつす。わかりました。失礼します」

携帯を閉じた。

そしてもの凄い勢いで近づくと俺を抑えていた二人を立て続けに蹴り倒した。

弾みで俺も倒れそうになる。

「失礼しました！」

その大男は深々と頭を下げた。

俺は何がなんだか分からずきょんとしてしまった。

「いや、あの……」

状況が飲み込めず言葉に困った。

大男は顔を上げ、さつきとは別人のような笑顔を向けた。

「貞二君のダチなら最初から言ってくださいよ。すいません、大丈夫ですか？」

結局この大男は貞二の知り合いだった。

名前は金崎聖矢^{かねさきせいや}。年は今年18歳。俺の2コ上。流聖会というチームのヘッドだった。

どういう繋がりかというと、貞二の兄貴の木庭流一^{きはりゅういち}が6年前に作った「流星会」というチームがあった。

しかし木庭流一が抜けた後、内部分裂が起こり消滅。その後この金崎聖矢が「流聖会」と名前を変え復活させた。

その際貞二も一役買ったらしく、なぜか金崎聖矢は年上にも関わらず貞二に敬語を使っている。

「じゃあ、今貞二くん入院してるんすか？」

俺は差し支えない範囲でこれまでの事を話した。

「ってゆーか、金崎さん敬語やめませんか？俺年下だし」

俺はさつきからの態度の変わりようについていけない。

「あ、そうっすね。あれ？まあそのうちに。俺の事は聖矢でいいっすよ」

さすがに呼び捨てにはできないので聖矢くんと呼ぶ事にした。

そして貞二の家の場所を聞いた。

聖矢くんはさすがにとまどったような顔をしたが、俺の決意が固いと見るとどこかへ電話してくれた。

「もしもし、お久しぶりです。金崎聖矢です。あのー、これからお時間空いてませんか？ちょっと会わせたい奴がいるんすけど…」

電話の相手は貞二の兄貴の木庭流一だった。聖矢くんは終始緊張しっぱなしだった。

ちよつとなら時間があるということでは会うことになった。

しかし、呼ばれた場所は事務所だった。

俺はありがとうと礼を言い、バイクに跨った。

「俺も行きます」

聖矢くんが意を決したように言った。

俺がいいよいいよと手を振ると

「貞二くんからも力になってくれって頼まれたんで…」

そう言っただけでなかった。

結局事務所まで案内してもらった事になった。

一緒にいた二人は悪いので帰した。ホッとした顔をしていたのが印象的だった。

まあ、普通に考えてヤクザ事務所に喜んでいく奴なんていないよな。そして俺は聖矢くんと共にバイクで走り出した。

木庭興業

貞二の地元の駅のロータリーに着きバイクを止めた。

左手には細い路地があり飲み屋街になっている。

その通りを100メートルほど進み、右に曲がるとキャバクラやスナックなどの看板がづらりと並んでいる。

客引きをシカトしてさらに奥へと進む。

聖矢くんがあるビルの前で立ち止まった。

緊張した面持ちで俺を見る。

「一番上が事務所です。他のフロアは全て企業舎弟です。さあ、行きますか」

そういつて聖矢くんはにっこり笑った。

その笑顔に俺も少し気が楽になった。

エレベーターを上がり最上階へ。

途中聖矢くんが監視カメラに向かって挨拶する。

扉が開いた。細い廊下が続く。

意外にも受付にはサラリーマン風の男が立っていた。

名前を言い奥へ通してもらう。

「応接室」と書かれた部屋へ案内された。

待つこと5分。

扉が開き、グレーのスーツ姿の男の人が入ってくる。

慌てて聖矢くんが立ち上がる。つられて俺も立ち上がった。

「聖矢、久しぶりだなあ」

穏やかなトーンなのにやたら迫力のある声。

アクのない涼しげな風貌をしているが、スキの無い動作がその筋独特の匂いをもじだしている。

「お久しぶりです。今日は突然無理言つてすみません」

「固い挨拶はその辺でいい。ま、座れよ。で、会わせたい奴とはこの子かい？」

そういいながら正面奥のソファーにどっかりと座った。

正面から見るとやはり貞二に似ている。

続いて俺らも腰を下ろした。

「半村忍と言います」

俺は短くそれだけ言った。

その態度に何かを感じたのか、膝に腕を乗せ前のめりの体勢になった。

しばらくの沈黙の後、ソファーに寄りかかると、おもむろにタバコを取り出す。

斜め後ろに控えていた若い男がすかさず火を付ける。

ピリピリとした緊張感が部屋の中を包んでいく。

「俺の名前を知っているかい？」

タバコをくゆらせながら鋭い目つきで俺を見る。

「はい。木庭流一さんですよ」

「ほう、俺がどうゆう人間か分かった上でここに来るとは大した度胸じゃないか。なあ、聖矢」

「はい、その辺のガキよりは肝据わってると思います」

貞二の兄貴はその言葉になぜか満足げに頷くと急に柔らかな口調になった。

「で、話って何だい？」

「権藤春樹の処遇についてです」

俺の言葉にまた表情が険しくなる。

「君は友達の命乞いに來たのか？」

「いえ、逆です。俺は貞二と同じ学校のダチです。自分が敵を討ちます。お兄さんには手を出さないでいただきたいのです」

貞二の兄貴は驚いた顔をした。その後太い声で豪快に笑った。

「そうか、君は貞二の友達か。あんな坊ちゃん校にもこんな子がいるもんなんだなあ。どうりで最近帰ってこないわけだ。でもなあ……」

目の前のテーブルに置かれたクリスタル製の灰皿にタバコを消すと

乾いた目で俺を見据える。

「こつちの世界の掟は絶対だ。権藤がどんな人物かは君も知っているだろう？ 例外はない。うちの怖さを知らない奴には容赦はしない。それだけだ」

いつの間にか自分の感情が乾いているのが分かった。あの時の感情に似ていた。

「権藤がどんな人物かは関係ないです。ただ邪魔されるのは御免です」

木庭流一はソファーに寄りかかると同時にテーブルを蹴った。クリスタル製の灰皿が虚しく床に転がる。

俺はそのテーブルを両手でおさえる。

隣を見ると聖矢くんもテーブルを抑えていた。

「おい聖矢！ このガキ連れてさっさと帰れ！」

聖矢くんは下を向いたまま

「コイツの助けになるって決めたんです。お願いです、コイツの好きなようにやらせてやってください！」

しばらく沈黙が続く。流一はまたタバコを取り出しくわえた。

すかさず付き人が火を付け灰皿をテーブルに戻す。

ゆつくりとタバコを吸いながら乾いた目で俺をじっとつみる。俺も目を逸らさなかった。

「お前ら、今何をしているのかわかっているのか？ そうか、本当の恐怖というものを知らないんだな」

そういうとおもむろにジャケットのポケットから拳銃を取り出した。俺のすぐ目の前に銃口が突きつけられる。

さっきまでとは比べ物にならない程、緊張感が高まる。

「ガキの遊びじゃないんだ。もう時間だ。さっさと帰りなさい」

それでも俺は引かなかった。いや、引けなかった。

真央が一生引きずるであろう感情がこんな黒い物体に負けちゃいけない。

「遊んでるわけじゃない。遊びでこんな所まで来ないですよ」

最後まで流一を見据えたまま静かにそう言った。

次の瞬間、

「パン！」

乾いた音が室内に響いた。

俺は横にいた聖矢くんがタツクルされたような形になり、ソファーに横向きで倒れていた。

その銃口は天井を向き、微かな煙を出している。

天井からはパラパラとコンクリートの破片が落っこちる。

バタバタと駆け足をしてくる音が近づくと勢いよくドアが開いた。

「カシラ！大丈夫ですか！」

ガタイのいい男が駆け込んできた。

「心配ない。ちょっと遊んでただけだ」

勢いよく駆け込んだものの状況がつかめないその男はその場で固まり、俺らと流一を交互に確認する。

「俺が撃たないと思ったかい？命のやり取りをそう簡単にしちやいけないよ。でもまあ、16のガキにしては上出来だ」

そついうと俺に優しく微笑んだ。

流一は立ち上がり、入ってきた男に拳銃を渡すと

「このガキに権藤に関する情報を渡してやれ。それから……」

周りを見渡した。

「お前らももうちょっとあのガキを見習え。テメーより弱い奴ばかり相手にしていると目が死んでいくぞ。久々に面白いガキに会った。今回はそいつに花を持たせてやってやれ、いいな」

そして何事も無かったかのように流一は事務所を後にした。

残された俺達はまだ動く事ができなかった。

今までに経験した事が無いほど心臓がバクバクと波打っていた。

しばらく呆然とし辛うじてソファーに座り直した頃、さっきのガタイのいい男が飲み物を持って入ってきた。

俺らは一気に飲み干した。やっと落ち着いてきた。

「カシラに気に入られたみたいだなあ」

そう言いながらさっきまで流一が座っていた場所にその男はどつかりと座った。

「気に入られたって…。あの、俺ら撃たれそうになったんですけど…」

「ガハハハ、そうだったなあ。でもあの人が面白いガキに会ったなんて言うのめずらしいからな」

そこまで言って真顔になり、

「でも二度と怒らせるなよ。死ぬぞ？」

ヤクザの顔でそう言った。

その後、その人から権藤に関する情報を教えてもらった。

帰り際、その男と連絡先をなかば強引に交換させられた。

何か分かったら教えるからというが、もっと違う意味が込められているのはバレバレ。

そして俺らは無事外へ出た。

夏の夜風が涼しく感じるほど、びっしょりと汗をかいていた。

夜風に吹かれて

「どうしてそこまで危険をおかせるんだ？」

近くの公園のベンチに寝そべり聖矢くんは聞いてきた。

俺は緊張で固まった筋肉をほぐすように鉄棒にぶら下がっていた。

「途中から緊張とか恐怖とかの感情がなくなってたから……。でも聖矢くんがいて助かった」

桜の木が青々とした葉をゆるい夏風になびかせている。

「助かったって、何もしてないけど……」

そう言いながら身体を起こし俺を見た。

俺は身体を揺らして助走をつけ、大きく跳んだ。

一瞬の開放の後、重力に引き込まれるように着地した。

「でもさ、何で俺みたいなガキに付き合って、やくざ相手に突っ張ったの？ しかも今日会ったばかりじゃん」

「なんでだろうなあ。最近、何やっててもつまんねーんだよ。周りは俺の顔色を伺う奴ばっかだし。それに……」

サッパリとした笑顔を俺に向ける。

「そんな奴らに囲まれてるうちにいつの間にか俺まで誰かの顔色を伺うようになってたんじゃないかって。自分の力が大きくなるにつれてもっと大きな力に恐れを感じるようになったり、下の者が俺に持つイメージに合わせようとしてたり。でも今日忍くん見て思い出したんだ。縛られてどうするんだって」

「俺だってそんなたいそうな奴じゃないよ。上に立った事もないし、誰かを仰いだ事もない。経験がないだけだよ。だから聖矢くんみたいな苦労や葛藤を知らないだけだと思うけど」

「いや、たぶん忍くんは変わらないよ。まあ、俺のカンだけど。それに流一さんと対峙してる時、こいつおもしれえって思った。初めてダチになれるかもって思った。そんだけ」

まっすぐ俺を見る。くさいセリフなのにそれを感じさせない雰囲気

に戸惑った。

照れもせず、取り入ろうともせず、ただ自分の本音を飾らずに言っている。

俺はこんな言葉を発した経験があっただろうか。カッコイイと思った。

「この件が全て終わったら遊びいこーよ」

「ああ、楽しみだな。俺も全力で協力するわ。何かあったら連絡くれよ」

いつの間にか敬語ではなくなっていた。

俺は聖矢くんと連絡先を交換して別れた。

真央のいる病院の前まで戻った。

タバコをふかしながらこれからについて考えた。

俺ができる事って何なのか。

今は権藤を見つけ出す事しか考えられない。

だけど見つけ出してどうする。仇をとるのか。

それは誰が望んでる事なのか。俺の自己満足なんじゃないのか。

これから先、ずっとこんな事を繰り返すのか。

街でカツアゲをし、パー券を売りつけ、物をパクっては売りさばく。

そして新たに敵を作り、恨みを買う。

巡り巡って俺の大事な誰かが傷つく。そして報復し新たに敵を作る。自分らのやりたいことをするには力が要る。邪魔されない為にも。

だけど全てを守りきる事ができるのか。

今日だってただ運が良かっただけだ。一歩間違えればどうなっていたか分からない。

じゃあ、全てを守りきる事ができないからっておとなしくしているのか。

そして縛られた生活や、無難な道を選ぶのか。

何一つはつきりとした事なんてわからなかった。

ただ何もしないのは耐えられなかった。

あんな事もあったねなんてそんな簡単に片付けられるほど軽いもんじゃない。

先のことを考えて生きれるほど器用じゃない。

今から俺がしようとしてる事は決して楽しい事じゃない。わかってる。

だけど後悔はしたくなかった。誰かがやらなくちゃいけないことなら俺がやってやる。

誰かに任せた人生なんて意味がない。そう思った。

思わぬ展開

結局、病院には入らずに帰った。
今の俺には会う資格がないと思った。
いや、ただ勇気がなかったんだ。

次の日から榎藤探しが始まった。
俺は米倉さんに連絡を取り、会うことにした。
場所は渋谷のロコモコ屋。

美波さんとのデートを思い出す。
あれ以来連絡を取っていない事に気付いたがそれどころじゃない。

俺が店に到着した時には米倉さんは一番奥の席で待っていた。
他のテーブルの女の子達がしきりに米倉さんの方を見ている。
俺の姿に気付いた米倉さんは手を上げ俺を呼ぶそぶりをした。
その時の笑顔はどこかのモデルのようだ。

久しぶりに見る米倉さんは高校時代よりもさらにかっこよくなっていた。

米倉さんの視線を追うように、他のテーブルの女の子達が俺の方を見る。

が、すぐに視線が米倉さんのほうへ戻る。

ちくしょう、この違いは何だろう。

俺は複雑な思いで周りの女の子を見ながら席についた。

「久しぶりだな、背伸びたなあ」

「いきなりイヤミっすか。まあちよつとは伸びましたけど」

180センチくらいはある米倉さんにはチビの気持ちは分かるまい。

「はは、そんなつもりじゃないけど。で、話ってなんだ？」

「Love6って知ってます？」

「知ってるも何も、よくそこでイベントするけど」

米倉さんは自分でイベントサークルを立ち上げ色々なクラブでイベントを主催している。

俺も何回か呼ばれて参加した事があった。

1000人規模の集客ができる米倉さんは各CLUBのプラチナカードを持っているらしい。

「今度の金曜日、俺を9Love6に連れてってもらえないっすか？」

「俺のサークルに入りたいのか？おまえ興味あったんか？」

「いや、全然そうじゃないんすけど、ちょっと色々あって。ダメっすかね？」

俺は真剣な眼差しで米倉さんの回答を待った。

少し考えている風だった。

そしてアイスコーヒーを一口含み一呼吸おいてから口を開いた。

「俺に近づいて来るやつは大抵二通り。俺に取り入りたいか、俺の名前を使ってイイ思いをしたいか。でも忍はどちらでもなさそうだな。何があった？」

「言えないっす」

考える間もなくハツキリとそう言ってしまった。

米倉さんは驚いた顔をしたが、ふいに嬉しそうに笑った。

「そうか、わかった。連れてってやる。ただし条件がある」

この際たいていの事なら何でも聞く覚悟はあった。

「…何すか？」

「サークルに入れ」

「は???」

「そしたら連れてってやるよ」

そう言って米倉さんはいたずらっぽく笑う。

なぜ俺がビックリしたかというと、入りたくても入れないサークルとして有名だったからだ。

何せ、サークルメンバーは都内の殆どのClubにフリーパスだし、一緒に行く奴でも500円で入れる。さらにドリンクチケットは貰

い放題。

なので入りたがってる奴らがわんさかいる。

メンバーも有名入ばかりで雑誌モデルやDJや引退したほかのサークルの代表が入りなおしたりと、それぞれが何かしらの集客力を持っていないとメンバーに入れないのだ。

そこに、俺みたいな何の取り柄もない16のガキが入っていい訳がない。

「え？でもさすがにそれはまずくないですか？」

「入らないんだったらこの話は無しかなく」

「わ、わかりました。入りますよ。そして恥をかけばいいんでしょ！」

「ははは、心配ないよ。お前だったらすぐに周りにも認められるよ」「絶対そんな事ないと思いますけど。まあ、米倉さんとまた遊ぶのも面白そうっすね。でも半月程待ってもらえないっすか？」

「何だ何だ？逃げる気だろ？」

「はは、逃げる気なら今言わないっすよ。そんなんじゃない、今やらなきゃならないことがあるんす。その事でサークルに迷惑かけたくはないんで」

今回の事をおおごにしくなかつたし、なるべく一人で動きたかった。

その時、米倉さんの携帯が鳴る。俺と会っている間中もひっきりなしに着信が入っていた。

殆どは着信画面を一瞬見ただけでシカト。だが初めて電話に出た。

一体この人が必要とする人は何人いるのだろうか。まあ俺もそのうちの一人なんだが。

そう考えると俺と会ってくれている米倉さんに感謝した。

なにやら今度のイベントの打ち合わせの電話みたいだ。

俺はアイスカフェオレを飲みながらタバコに火を付け電話が終わるのを待った。

話の内容は協賛がどうだとか費用対効果がなんちゃらとか俺にはま

るで縁のない話をしている。

米倉さんは完全に仕事としてイベントサークルを運営しているようだ。

そんな姿をぼんやり見ていると、ふいに電話をしている米倉さんが一瞬俺を見て不敵な笑みをする。

「そーか。じゃあそれで進めてくれ。後で合流する。それから今VIP接待にもってこいの奴を見つけたから何とかかなりそうだ。結構面白い奴だからたぶん大丈夫。じゃ、また後で」

そう言つて電話を切った。

「何かすいません、忙しいのに時間作ってもらつて」

「いや、大丈夫。それより、金曜の夜11時30分に渋谷で合流な。それからその次の日の夕方にも手伝ってもらいたい事がある。時間あるか？」

権藤を探し出すのには少しでも時間が惜しい所だが、あまり米倉さんの要求を断るわけにもいかなかった。

「わかりました。時間あまりないですけどそれでよければ」

「よかった。助かるよ。ま、そんなにかからないはずだから。3時間ぐらいだと思う。それとメンバー入りの話もそっちが落ち着いてからでいいからな」

俺らは店を出て、センター街を歩き駅の方へ向かった。

途中、色々な人に声をかけられる米倉さんのおかげで30分くらいかかった。

その度に「こいつ誰？」という視線が俺に向けられた。

米倉さんは「後輩」という説明のみ。

これから先、しばらくこんな光景が続くと思うとちよつと悲しくなった。

そんな俺の気持ちを察してか米倉さんが口を開く。

「まあ。最初だけだ。そのうち普通になつて誰も何も聞かなくなるよ」

「そんなもんすかね。だけど会話が薄っぺらく感じるんですけど。何か疲れそう」

「はは、そりゃあ、何千、何万人にも会えば殆どはうすっぺらいだろ。けどそんな奴らだからイベントに参加してその色に染まりたいんだと思う。同じような格好して同じような行動。さらに同じような口調、話題、恋愛。俺はそいつらのスタンダードを作り上げる。だから色んな奴らの話を聞いて求められているイベントを提供する。だから俺にとっては大事な奴らさ」

「俺にはまだわからないです。たぶんまだガキなんすよ。だって周りに合わせてる余裕なんてないっすから」

「その気持ちを忘れるなよ。常に少しずつ違った色を提供していかなかったら飽きられるからな。ってまだそこまで考えなくてもイイか。まあ俺について来い。違った景色が見れるかもしれんから」

俺にはその景色が楽しいものなのかは全然わからなかったが、米倉さんが作り上げる世界には興味があった。そして駅に着き米倉さんと別れた。

その日の夜俺は瞳ちゃんに連絡をし、一緒にCLUBに行ってくれないかと頼んでみた。

いくら米倉さんが一緒に行くとはいえ、絶対色々な人と話すだろうし途中でどっか行くかもしれない。

正直、そうになったら俺自身が右往左往しそうで何となく不安だった。権藤たちを探し出すという目的ははつきりしていたが、自分の居場所が確保できなかったら行っただけで終わりそうな気がした。

その点、瞳ちゃんならそんな場所も行き慣れているだろうと思ったし、今回の事情も知っている。恥をしのんで頼んだ。

意外にも二つ返事で了解してくれた。

女同士で行くとナンパされるのがウザいし、男と行くと何かされそうで不安らしい。

その点、忍君なら安心して楽しめるねって、男として喜んでいいの

か悲しんでいいのかわからない了解のしかただったけど。

電話を切ると譬からメールが来ていた。

真央の容態が回復して、来週にも退院する予定だそうだ。

貞二も足の手術の日が今度の日曜日に決まったそうだ。

そして最近俺が一人で動いている事を気にしていた。

最後に「無茶はするなよ」と入っていた。

俺は「大丈夫。心配するな」とメールを返し眠りについた。

バイクと共に

そして金曜日の夜。

米倉さんと会った日からあまり眠れていない。

頭で考えるより先に行動するタイプの俺には考えているだけという日々は苦痛だった。

だが、誰かと遊ぶ気にもなれず1人でいた。

外出といえば真央の病院の前まで行つてはタバコを一服して帰るという程度。

飯も食わず、睡眠もろくに取れていないにもかかわらず、何故か神経だけは異常に研ぎ澄まされていく感覚があった。

携帯の着信を知らせるランプが光った。

1コールも経たないうちに誰からの着信か確認し電話にでた。
瞳ちゃんからだ。

「お疲れ。準備できた？」

「電話出るの早っ！私は準備できてるよ」

「そうか。今から迎え行く。駅前のコンビニで待つてて」

「うんわかった。でもどうしたの？何か怖い。機嫌悪いみたい……」
「別にそんなことないよ」

そう言つて携帯を切り、家を出た。

庭に停めてある貞二のバイク。

月明かりに照らされオイルタンクが光っていた。

俺はしばらくタンクに触れたまま目を閉じた。

今まで頭の中で繰り返し考えてきた事。

仇を取ることに何の意味がある？復讐から生まれるものってなんだ？自己満足？

いや、今の俺には自分の気持ちにケリをつける方法がこれしか思いつかない。

考えが未熟で子供と思われてもいい。だけど腐った大人になるつもりもさらさらなかった。

ただそれだけ。俺がやれることをする。他の誰かから意味ないことと思われても構わない。

またみんなで笑いあえる場所を取り戻す。だから全てを終わらせる為の戦いなんだと。

静かに目を開けた。迷いはなかった。

エンジンをかけ、ライトを着けた。

そして照らし出す光の先を追いかけるようにアクセルを吹かす。闇を切り裂き走り出した。何かを吹っ切るように。

夜の蛍

瞳ちゃんを迎えに行くといつもとは違う雰囲気の彼女が立っていた。といつても制服姿の彼女しか知らなかったが。

雑誌では清楚なイメージの服装が多かったせいもある。

しかし今日はセシルのローライズジーンズにボーダーカットソーとリップのキャップ。

キャップとジーンズにはキラキラの刺繍がしてあった。

ジーンズとサンダルの間隙からはハート型のアンクレットが光っている。

ロータリーにバイクを止め、しばらくその場でタバコに火を付け、瞳ちゃんを眺めていた。

コンビニの前で携帯を見つめる瞳ちゃんがやけに輝いて見えた。

コンビニの光が当たっていたからなのか。

いやきつと今の俺があまりにも黒いせいなのかかもしれない。

くすんでいる世界がそこだけ色鮮やかになっているように見えた。

世の中の不幸を全て背負ってる気がしていた自分がバカらしくなった。

自嘲気味に笑った後タバコを投げ捨て、コンビニの前までバイクを動かした。

「ゴメン、待った？おお、どっかのモデルさんみたいだな」

「ははっ、ありがと。でも一応モデルさんなんですけど」

そう言うのと腰に手を当て撮影用のポーズをとっておどけた。

俺は構わず半ボウのメットをかぶせる。

しかしさすがはモデル。

頭が小さすぎてキャップの上からメットをしているのにメットがちょつとずり落ちる。

キメポーズのまま、ずれたメットをかぶっている姿が可笑しかった。「もう、忍君は女の子に興味ないわけ？それともこの格好あんまり

似合っていないのかな。んゝ、普段の私だったらイチコロのはずなんですけど」

「はいはい、普段はピッコロなのね。口からタマゴとか出すなよ？」

「誰もピッコロ言っていないし。もう、意味わかんないし。紫の血とが出ないし。腕は若干伸びるけど」

「伸びるんかい。まあ早く乗れよ、ダルシム」

「誰がダルシムやねゝん。燃やしちゃうゾ」

そう言いながら元気に飛び乗ってきた。

そして細い腕で俺の腰にしっかりと捕まった。

その時俺は女を乗せて走るのが初めてなのに気が付いた。

いつもは馨や貞二の後ろに乗ってる事が多いし、たまに俺が運転しても後ろに乗せるのは男ばかりだったから大抵バイクのどこかを掴んでいる。

こんな風に密着されてちよつとドキドキした。

「バイク乗るの初めてだからちよつと怖いな」

「そっか。しっかり掴まっていれば大丈夫だよ」

さっきよりも強めに掴まれてさらにドキドキした。

そしていつもよりややゆっくりなスピードで渋谷へ向かった。

夜の渋谷とギャル男

俺達は渋谷に着いた。

とりあえず米倉さんに電話する。

「今、渋谷着いたんすけどドコ行けばいいんですか？」

「おお、早いな。とりあえず誰か迎えに行かせるわ」

そんなやり取りのあと俺達は西武の前で待つことになった。

しばらくすると、キヨロキヨロと辺りを見渡す顔グロのギャル男が現れた。

多分俺の事を探してるんだと思ったけど、確信がないのでそのまま様子見ることにした。

万一間違えた時に揉めるのも面倒だし、こっちは女連れだし…、っ
て思ったときに気が付いた。

そーいえば、瞳ちゃん連れていく事を伝えるのを忘れてた。

ギャル男はそれで話しかけて来ないんだと思いこっちから声かけた。

「あのー、もしかして米倉さんの知り合いですか？」

「え？あ、君たちがそーなの？」

外見とは裏腹に気さくな口調だった。

「すいません、連れがいるって伝えなかったんで…」

俺がそう言つと、瞳ちゃんもペコリと頭を下げた。

「あ、こっちこそ気づかずにごめんね。ははっ、可愛い彼女じゃん」

俺が否定する間もなく、

「じゃ、ついてきてね」

と言いながらギャル男はスタスタと歩いていく。

慌ててバイクを押しながら後を追った。

途中、瞳ちゃんが

「ねえねえ、彼女だつて。どうする？」

と小悪魔のような笑みで聞いてきたので

「あ、ゴメンね。何か言いそびれた」

って謝った。

「どうする？このまま付き合っちゃう？私は別にいいよ、忍くんチワワみたいで可愛いし」

完全に悪のりしてる目でこっちを見てくる。

「んゝゝ、ないな」

…ちくしょう、メツチャすね蹴られたぞ。

そんなやり取りをしながらついていく最中も、ギャル男はすれ違う女の子に知り合いがいるようで挨拶しながら歩いていた。

そんな様子を見ていた瞳ちゃんが「あっ！」と何かを思い出したような声をあげ、

「あの人、有名なサークルの代表だ。この間、イベント誘われて行ったときステージで挨拶してたもん」

と教えてくれた。

俺は

「ふーん、そうなんだ…」

独り言のように呟き、前に米倉さんに言われたサークル入りの話を思い出しちよつと落ち込んだ。

タワーレコードの脇を抜け、少し坂を上り、細い小道に入ったところでハーレーがいつぱいおいてあるバイク屋に着いた。

「二階にみんないるから、バイクその辺に突っ込んで上がってきなね」

と言ってギャル男は一人でさっさと行ってしまう。

俺は置いてある高級そうなバイクを傷付けないように慎重に置いてから、二階に上がった。

イベントサークル代表の男達

二階に上がると事務所兼応接室といった感じの部屋でソファが4つあり、正面に米倉さんが座っていた。

米倉さんの周りにはあと2人の男がいた。

左のソファにはヒゲ坊主でサングラスをかけた色の黒い男。

右のソファには金髪をピンで留めたジャーニーズ系の男。

何かの打ち合わせの最中だったらしく、それぞれ書類をペラペラとめくっている。

ここまで案内してくれたギャル男はデカイ鏡の前でもくもくとトラパラのフリの練習をしている。

米倉さんは電話片手にバドワイザーを飲んでいた。

突っ立っている俺達の存在に気付き手招きすると、「後でかけ直す」といって電話を切った。

「おお、いきなり女連れかあ。忍も大人になったもんだ。まあそこ座れよ」

と俺達を米倉さんの正面の空いているソファに促してくれた。

とりあえず、瞳ちゃんと並んで座る。チラッと横見たら完全に緊張してる瞳ちゃんがいた。ちよつとウケた。

「すごいすねえ、この雰囲気。なんかロツクのPVみたいすよ」緊張感のまるでない俺の発言に周りの男が書類を見ながら吹き出した。

「あれ？なんか間違えました？あ、俺、半村忍です。この子は中谷瞳ちゃん。今日は米倉さんにクラブ連れてってくれるって言われたんで来ました。よろしくつす」

そうしたら、左の坊主男が書類から目を離し聞いてきた。

「俺、フュージョンってサークルの代表やってる榊。よろしく。隣の子は彼女？」

「あ、全然違います。俺、クラブ行ったことなくて怖かったんでつ

いてきてもらいました」

何故か爆笑された。

米倉さんなんかバドワイザー噴き出してた。

テーブルにこぼれたバドワイザー拭きながら

「こいつおもしれーだろ。俺の後輩。まだ16だけどその辺のガキとはちよつと違うから俺んとこに混ぜることにしたんだ。まあ、面倒見てやってくれよ」

米倉さんがそういうともう一人のジャニーズ系も喋ってくれた。

「クラブ行くのに保護者同伴って、確かにちよつと違うわ。あーおもしれえ。気に入ったわ。あ、俺は誠ね。そっちのお姉ちゃんはいくつなの？」

「わ、私も16です」

「マジで!？」

みんなが一斉に驚いた。何となく俺も驚いてみた。

そしたらすかさず榊さんが突っ込んでくれた。

なんか速攻で打ち解けていった。瞳ちゃんもいくぶん緊張が解けたようであちよつと安心した。

その後、米倉さんとこの人達の関係を教えてくれた。4人ともそれぞれ自分のサークルを持っていて互いに協力しあってるうちに1つの連合になつたらしい。

で、一番影響力が強く色々な繋がりが多い米倉さんが総代表になつたみたい。

そんな話をしている最中もずつと鏡の前で踊り続けるギャル男が気になり米倉さんに聞いてみると、

「あいつ、絶対混ざるタイミング逃して、仕方なくああやってんだよ。おもしれーからもうちよつと放置な」

そう言つて笑つてると榊さんも、

「そうそう、だってあいつ鏡越しにチラチラこつち見てるのバレバレ」

今度は誠さんが、

「あいつあー見えてシャイだからなあ。でもすんげー女好きだから瞳ちゃん気を付けてね。目が合うだけで妊娠しちゃうって噂だから」そんなことを言いながらゲラゲラ笑ってた。

俺は笑っていいのか迷いながらも、何かいいなあこの雰囲気ってた。

ギャル男が若干顔を赤くしながら踊ってるのを見かねて米倉さんが助け船を出した。

「ほら、てっちゃん。ちゃんとご挨拶しなさい」

そう言われたギャル男はフリを止め、こっちを向き、きをつけをしてちよつと頭の足りない子のふりをしながら、

「小林哲です！19しゃいです！B・トラの代表やってます！」

そこまで言って耐えきれなくなったのか、

「もー勘弁してくれー。放置プレーにもほどがあるだろ。お前らどんなドSなんだよ」

と言いながら、ちゃっかり瞳ちゃんの隣に座ると、

「まあ、君のドSプレイなら大歓迎だよ」

と無駄にイイ声で言った。

「……」

無言でちよつと俺の方に寄る瞳ちゃん。

さらに爆笑した。

最近、全然笑うことなんてなかった俺は一時でもこういう気持ちにさせてくれたみんなに感謝していた。

気づいたらみんなでバドワイザー飲んでて、0時近くなりそろそろ行こうかってなった。

俺は周りに気づかれないように一瞬顔を引き締めた。

9 l o v e 6 前 の 喧 騒

夜の渋谷を歩く。

俺と瞳ちゃんは4人の後をついていく。

しかしそこは渋谷で有名なサークルの代表達。

スペイン坂を抜け、センター街に出る頃にはすでに10人以上の取りまきが集まってくる。

俺達2人は見失わないようにそのかたまりを追う。

が、無理だった。

なぜなら、センター街を過ぎ、駅前のスクランブル交差点を右に行く頃にはどこからともなく集まってきた各サークルのメンバーや、その繋がりの人達で50人くらいに膨れ上がっていた。

結局、9 l o v e 6 前には瞳ちゃんに連れていってもらった。

だけど、店前まできてウンザリした。

クラブはビルの6階にある。

そこにはエレベーター待ちの人達がすでに50人はいた。

それに米倉さん達の集団が合流したもんだからエレベーター前は大混雑。

もう米倉さん達がどこにいるのかもわからなくなった。

とりあえず道に面したガードレールに腰掛け携帯で連絡を取る。

「あ、もしもし米倉さん？」

「おう、忍か。今どこだ？俺と一緒に入らないとお前らの年齢じゃ入れてくんねーぞ？」

「いや、すいません。何か圧倒されてはぐれました。今ビルの前で。エレベーター全然乗れなくて……」

「しょうがねーなあ。とりあえず下降りるわ」
「ありがとうございます」

電話を切った。迎えに来てもらうことに申し訳ないと思いつつも、ホッとした。

一服しようとたばこをポケットから取り出した時、知らない男に声をかけられた。
と言ってもかけられたのは俺じゃなかったけど。

「あれ？もしかして中谷瞳じゃね？」

ブサイクなギャル男2人組だった。
どうみてもただ流行りに乗ってるだけのチャラ男もどき。
メッシュの入った長髪にキャップをかぶっているギャル男。
もう一人は顔の黒い鼻ピをしたデブ。
鼻ピが鼻くそにしか見えねえ。

瞳ちゃんは、びっくりしたように

「はい、そうですけど…」

と答えた。

すると長髪メッシュが

「やつぱり！俺、雑誌持ってるもん」
と言っている。

「あ、ありがとうございます」

と少し怯えたように瞳ちゃんが答えていた。
俺は瞳ちゃんがモデルだって事を再認識した。
結構有名なんだなあ。

それで、どうしたらいいか少し迷った。
ただのナンパなら追い払えるが、ファンって言ってるしなあ…。

でも瞳ちゃんはしきりにこっちを見てくる。

あれ？俺と一緒にいる所とか知られるとまずいのか？色々噂が立つと仕事に支障がでるのかな？とか考えてた。

そんな俺の存在には一向に気付かない長髪男は

「やべえ、マジかわいい。なあ、俺らと一緒に中入らねえ？」

と、強引に腕を掴む。

「いえ、やめてください。ちょ、ちょっと困ります……」

「いーじゃんよ。ドリンクおごってあげるからさ」

「いえ結構ですから」

ちよつとしたいざこざになりそうな気配がした。

これはやっぱ止めたほうがいいなと思いはじめた時、もう一人のデブ鼻ピ男が言い出した。

「あん？何だよ、芸能人気取りかよ。つーか写真とイメージ違うのな。声もあん

ま可愛くねえし。何かムカついてきた。なあ、俺を誰だかわわってんの？」

あ、コイツはファンでも何でもない。ただのバカだ。

そう確信した俺は、ガードレールに腰掛けたまま、呟く。

「知らねーよ……」

そう言い捨てタバコに火をつけた。

その言葉に反応した男達が俺を見た。

「ああ！？何だ、お前？」

お決まりの返事が返ってきたところで俺はそいつらを見て、吐き捨てるように言う。

「金色の鼻クソつけたデブ猿なんて誰も知らねえって言ってるんだよ」

さすがに怒ったようだ。眉間にシワをよせ俺を囲むようににじりよる。

しかし俺が一人なのを確認すると、途端にニヤニヤと下品な笑みを浮かべた。

俺はうんざりした。こういうときにこんな笑みをする奴は大抵、口ばっかのへたれ。相手にすんのもバカらしい。

「はっ、かつこつけやがって。お前こそ誰だよ、なあ！」

「・・・・・・・・」

「何？　びびってんの？　つかお前、俺らにたてついてココ入れると思ってるの？　俺らエデンの代表とダチだよ？　目障りだからどっか行けよ！」

「・・・・・・・・」

そう言っただけでそのデブは俺の胸倉を掴んだ。

エデンは米倉さんのサークルだ。何だ、サークルにはこんな奴らばっかりなのか……。

やっぱりサークル入りは断ろう。こんな奴らって何が楽しいのかわからない。

そう思ってしまったばかりに俺は気づいたら行動に出ていた。

「猿がキーキーうるせえんだよ！」

俺はタバコの火を掴まれたデブの腕に押し付けた。

そのまま腕と服を掴み、足払いをしてデブの態勢を崩した後、ガードレールの上にわき腹から投げ落とす。

相手が重かったため、俺も体勢を崩し、デブに乗っかるような形になった。

鈍い音がした。

そいつはそのままガードレールの向こう側に崩れ落ちる。

何か苦しそうに叫んでいる。

周りの視線が一斉にこっちに集まる。

近くにいた人達は下がり、俺の周りにはその男達と瞳ちゃんだけになった。

長髪の男は何が起こったのかわかっていないように固まったまま動かない。

俺は立ち上がり、長髪の男に向き直った。

「なあ、目障り・・・」

というと、男はデブを見捨てて逃げていった。最低な奴だ。

その時にはかなりの人ばかりが出来ていた。

しかし俺の周り3メートルには誰も近づいてこないが。

そんな中、人垣を掻き分け近づいてくる人物がいた。

俺は「あ、やべえ・・・」と思った。

そう、その人物は米倉さんだった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2056f/>

空色の約束

2011年5月26日22時53分発行